

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.166

2007年3月

「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」プロジェクト  
キックオフシンポジウムを開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

## 目次

### ●ニュース

「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」プロジェクト キックオフシンポジウムを開催	3
女子中高生理系進路選択支援事業による公開科学講座及び懇談会を開催	4
野依特別教授と李 遠哲名誉博士の高等研究院名誉院長への就任が決定	5
相撲部が舛名大激励会を開催	5
平成19年度名古屋大学入学試験を実施	6
第3回名古屋大学マネジメントセミナーを開催	6
職員のためのセクシュアル・ハラスメント防止研修会を実施	7
第3回国際業務職員トレーニングセミナーを開催	7

### ●知の先端

惑星からの手紙 一氷の科学— 奥地拓生（大学院環境学研究科助手／高等研究院教員）	8
---	---

### ●教育のデザインとプラクティス

メディアリテラシーの実践的な養成の試み 後藤明史（情報メディア教育センター助教授）	10
見せて魅せる「名大の授業」 中井俊樹（高等教育研究センター助教授）	12

### ●学生の元気

名大の自然と歩む 一名古屋大学生物研究会— 松田 学（理学部物理学科4年）	14
多くの人に支えられて、いざ、角界へ！ 田中周一（工学部化学・生物工学科4年）	15

### ●部局ニュース

愛知県農業総合試験場と研究協力に関する協定調印式を挙行	16
韓国 済州青年訪日研修団が文学研究科を訪問	17
名大附三者フォーラムを開催	17
地域貢献特別支援事業による地方自治体との連携事業を実施	18
年代測定総合研究センターが国際シンポジウムを開催	18
留学生のための就職支援セミナー（第4回）を開催	19
地震発光現象ワークショップを開催	19
平成18年度先端技術共同研究センターオープンフォーラムを開催	20
博物館が中学生の職場体験学習を受け入れる	20
第10回博物館企画展「名大キャンパスの野鳥」を開催	21

### ●定年退職される教授のことば

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成19年1月16日～2月15日	36
---------------------------------	----

### ●イベントカレンダー

●トピックスの表紙で綴るキャンパスの建物	42
----------------------	----

### ●ちょっと名大史

農学部旧安城キャンパス記念碑	44
----------------	----

# 「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」プロジェクト キックオフシンポジウムを開催





先端融合領域イノベーション創出拠点の形成プログラム「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」プロジェクトのキックオフシンポジウムが、1月25日(木)、IB電子情報館大講義室において開催されました。

本プロジェクトは、文部科学省の平成18年度科学技術振興調整費による先端融合領域イノベーション創出拠点の形成プログラムの新規課題として採択されたもので、「手のひらに大病院」というコンセプトのもと、「個の発症予防と疾患の早期発見」を目指す次世代先端医療の確立を目標に、産学、医工の研究者が有機的に協働する医工連携研究拠点を形成し、10～15年後のイノベーションを目指すものです。

当日は、来賓の方々をはじめ、協働企業である伊藤忠商事株式会社、オリンパス株式会社、日本ガイシ株式会社、富士通株式会社からも多数の参加があり、学内外より総勢200名以上が参加しました。

まず、杉浦理事の司会のもと、平野総長が式辞として、本プロジェクトの意義と本学としての期待及び協働企業との力の結集によるイノベーション創出の拠点形成への意欲を述べました。

次に、森口泰孝文部科学省科学技術・学術政策局長が祝辞として、現在の日本におけるイノベーション創出拠点の必要性を述べ、同日行われた赤崎記念研究館4階にある本プロジェクト拠点への視察を踏まえて、本プロジェクトへの期待を述べました。

その後、柘植綾夫前総合科学技術会議議員が、「先端融合領域イノベーション創出拠点への期待『イノベーション創出能力強化と人材育成～知の創造と価値創造の結合強化に向けた産学官連携～』」と題し、我が国は明治維新、戦後復興に次ぐ重大革新期に入っており、国づくりに科学技術が果たすべき役割は大きく、特に「産学官協働の知の創造と結合」、「知の創造と社会経済価値との結合」、「知の結合による価値創造を行うΣ型人材育成」を行うナショナル・イノベーション・パイプライン網の整備が不可欠であるとし、それを担う本学予防早期医療創成センターへの期待を示しました。これに続き、加藤延夫愛知医科大学理事長・元本学総長が「この地域におけるバイオテクノロジー振興計画の進展」と題し、「科学技術に関する懇談会」から「東海バイオものづくり創成プロジェク

- |   |   |                            |
|---|---|----------------------------|
| 2 | 3 | 1 式辞を述べる総長                 |
|   | 4 | 2 会場の様子                    |
|   | 5 | 3 祝辞を述べる森口文部科学省科学技術・学術政策局長 |
- 1
- 4 講演する柘植前総合科学技術会議議員
  - 5 講演する加藤愛知医科大学理事長・元本学総長

ト」に至る経緯と本学のバイオ・医療研究の歴史を詳しく述べ、更に第2次大戦中に本学が予防医学講座を開講した史実に触れて、後進への期待と本プロジェクトへの期待を示しました。

休憩を挟み、本多裕之工学研究科教授、太田美智男医学系研究科教授、馬場嘉信工学研究科教授が、本プロジェクトの内容をオリジナルのアニメーション等を交えながら丁寧に説明しました。閉会后、本プロジェクト拠点の見学会及び懇親会を行って親交を深め、プロジェクトの意義と重要性を再確認した充実したシンポジウムとなりました。

# 女子中高生理系進路選択支援事業による公開科学講座 及び懇談会を開催

「科学しようよ！－女子中高生のための名古屋大学理系女子教員による公開科学講座－」が、2月10日(土)、理学部1号館等において開催されました。本講座は、平成18年度文部科学省「女子中高生理系進路選択支援事業」に採択された「めざせ女性科学者－女子中高生理系進路選択支援事業」の一環として、男女共同参画室の主催により行われたものです。

公開科学講座は、3つの会場に分かれて行われ、理学部1号館では伊藤由佳理多元数理科学研究科講師が「数学の旅に出かけよう！」と題し、形として美しいと感じられる「対称性」について、数学の世界や数学者の美的感覚などを紹介しながら講義や演習をしました。工学部1号館では、山本智代工学研究科講師が「化学は暗記じゃない！～化学



伊藤講師の講座の様子



山本講師の講座の様子



東村助教授の講座の様子



個別相談会の様子



懇談会の様子

で新しいモノをつくる～」と題し、様々な高分子材料に触れながら、その仕組みを紹介しました。農学部B館では、東村博子生命農学研究科助教授が「ホルモンが行動を変える?!」と題し、実際に動物と触れあひながら講義と実習を行いました。参加した東海3県下の女子中高生とその保護者や中学・高校教諭は、活気あふれる講義や実習に熱心に聞き入り、取り組みました。

また、同日、野依記念学術交流館において、「女子中高生を持つ保護者と中高教諭のみなさんと名古屋大学理系教員との懇談会」が開催されました。

大学教員との懇談会・個別相談会では、大学院理学研究科、大学院工学研究科、大学院生命農学研究科、大学院多元数理科学研究科長及び副研究科長や教員が、中高生の保護者及び教諭からの志望進路等の相談に応じました。

引き続き、合同懇談会が行われ、教諭及び保護者の他、公開科学講座を終えた女子生徒や、本学研究者、学部学生、大学院学生など総勢約100名の参加者が、和やかな雰囲気の中で懇談をしました。参加した女子中高生からは、「大学のことがよく分かったので参加して良かった」、「名大を目指して頑張ります」との声も聞かれ、成功裏に終了しました。

## 野依特別教授と李 遠哲名誉博士の高等研究院名誉院長への就任が決定

本学国際諮問委員会（インターナショナル・アドバイザーボード）の委員も務める野依良治本学特別教授（理化学研究所理事長）及び李 遠哲本学名誉博士（前台湾中央研究院院長）が、本年4月1日より、名古屋大学高等研究院名誉院長に就任することが決まりました。同職への就任を依頼するにあたっては、平野総長が両氏に直接お願いにあがり、李博士への依頼の際は、台湾まで出向きました。

高等研究院は、本学における最高水準の研究活動を推進し、世界的に卓抜した研究成果を挙げるとともに、本学の目指す理想的な学術研究のあり方を実現するための機関で、平成14年4月の創設以降、様々な世界的水準の研究及び萌芽的研究の支援を行っており、目下、新たに「高等研究院研究者育成特別プログラム（日本型テニュアトラック制度）を実施しています。ノーベル化学賞受賞者であり世界的に著名な両氏より、国際的視点からの助言をいただき、本学をさらに発展させるとともに、同研究院がアカデミーとしての役割を発揮できるよう活動を充実させていく予定です。

### 高等研究院名誉院長 略歴

#### 野依良治 博士 (Ryoji Noyori)

1972 名古屋大学教授、1997 名古屋大学理学研究科長、2003 理化学研究所理事長、2004 名古屋大学特別教授、2000 文化勲章受章、2001 ウルフ賞受賞、2001 ノーベル化学賞受賞

#### 李 遠哲 博士 (Yuan Tseh Lee)

1973 シカゴ大学教授、1974 カリフォルニア大学教授、1994 台湾中央研究院院長、1986 ノーベル化学賞受賞、1986 米国科学メダル受賞、2003 名古屋大学名誉博士

## 相撲部が舂名大激励会を開催

名古屋大学相撲部が、1月27日(土)、東山キャンパス内相撲道場において、先場所角界入りし、今年初場所に序ノ口（西30枚目）で6勝1敗の好成績を取めた舂名大（田中周一さん、工学部4年在学中）の激励会を開催しました。

激励会には、平野総長、千賀ノ浦親方、加藤延夫本学相撲部会長・元総長、東北大学相撲部監督で横綱審議委員でもある脚本家の内館牧子氏らが招かれ、舂名大の初場所での健闘を讃えるとともに来場所以降の活躍を祈念しました。



(左から) 千賀ノ浦親方、平野総長、加藤元総長、内館氏



細谷師範(右)とぶつかり稽古をする舂名大(左)

舂名大は、後輩部員やOB、東京大学、京都大学などから駆けつけた相撲部員ら20人余りと、立て続けに相撲を取った後、細谷辰之相撲部師範とぶつかり稽古を行うなど、約1時間にわたって熱気溢れる稽古を披露しました。

総長は「初場所の優勝決定戦では惜しくも序ノ口優勝を逃したが、卒業研究との二足のわらじで稽古不足の中、大いに健闘した。今後も全学をあげて応援している」と激励し、内館氏も「一度きりの人生でやりたいことに挑戦する姿勢は実にすばらしい。今後の活躍を期待している」とエールを送りました。

100人以上集まった参加者に、相撲部員が作ったちゃんこが振る舞われ、なごやかな雰囲気ではじめに、舂名大は「こんなに大勢の方が自分を応援してくれていることにあらためて感謝したい」と謝辞を述べ、「稽古に精進して、これからも頑張っていきたい」と決意を新たにしました。

(2月26日(月)、序二段(東62枚目)への昇進が、日本相撲協会から発表されました。)

## 平成19年度名古屋大学入学試験を実施

平成19年度名古屋大学入学試験（個別学力検査）の前期日程が、2月25日（日）、東山地区及び大幸地区で行われ、1,656名の募集人員に対し、4,596名が受験しました。

試験当日は、晴天に恵まれ、受験生が午前7時すぎから会場に集まり始め、参考書やノートで最終確認をしたり、友人と話をしたりしながら、本番に備えていました。また、



試験会場の様子

受験票を片手に緊張した面持ちで来学した受験生を案内する職員や学生の姿がキャンパスのあちらこちで見られました。

午前9時から外国語の試験が9学部で一斉に始まり、受験生は真剣な表情で問題に取り組んでいました。また、平野総長や豊田理事・事務局長が各試験場を訪れ、試験場主任や教職員を激励しました。各学部の試験は午後5時30分にはすべて終了し、受験生は、お互いに試験問題について話し合いながら、家路に着きました。

また、前期日程試験の合格発表が3月8日（木）正午から全学教育棟本館で、後期日程試験が、3月12日（月）、東山地区、鶴舞地区及び大幸地区で行われました。

なお、後期日程試験の合格発表は、3月22日（木）正午から、全学教育棟本館で行われます。

## 第3回名古屋大学マネジメントセミナーを開催

第3回マネジメントセミナーが、2月9日（金）、理学部1号館講義室において開催されました。

本セミナーは、本学職員のさらなる意識改革と改革意欲の醸成、法人経営等に資する専門的知識の収集等を目的に行われるもので、第3回を迎えた今回は、企業における中長期的かつグローバルな視点に立った戦略や人材育



講演する榊原社長

成に対する取り組みを大学運営にも活かしていくことをテーマに、本学卒業生で、経営協議会の学外委員でもある榊原定征東レ株式会社代表取締役社長を講師に迎え、「東レの経営改革と人材育成」と題した講演が行われました。

講演会には、平野総長をはじめ、役員、部局長及び事務系の幹部職員84名が参加し、榊原社長の長期経営ビジョンに基づく経営改革による高収益への転換と、「人を基本とする経営」という基本理念に基づく能力・成果主義による人事・処遇の徹底や、基幹人材の安定継続採用と育成重視の人事管理等、様々な人材育成施策に取り組むとともに、徹底した要員の効率化・合理化を図り、厳しい国際的競争力に耐え得る高い労働生産性を実現し、企業体質の強化を実践した貴重な経験による講演を傾聴しました。

講演後の質疑応答においても活発な意見交換を行い、榊原社長の「企業経営」に対する強い信念に触れ、財政状況の厳しい中での大学運営に対する知見を深めることができ、有意義なセミナーとなりました。

## 職員のためのセクシュアル・ハラスメント防止研修会を実施

職員のためのセクシュアル・ハラスメント（セクハラ）防止研修会が、1月22日（月）、29日（月）、31日（水）の3日間、医学部附属病院等の職員、掛長以上の管理監督者、主任以下の職員等それぞれを対象に実施されました。

この研修会は、セクハラ防止対策委員会の主催で、セクハラ理解と早期発見・防止、身近で起こった時の対応及びリスクマネジメントの視点から、セクハラ問題を考えることを目的として開催され、3日間で約280名が参加しました。

22日（月）、29日（月）の研修会では、近藤セクシュアル・

ハラスメント相談所長から、本学のセクハラ防止体制と同相談所について説明があった後、静岡県弁護士会所属の角田由紀子弁護士から「法的な視点からセクシュアル・ハラスメントの問題をどう考えるか」と題した講演がありました。医学部附属病院等の職員へは、医療従事者としての対応について、管理監督者へは、管理職としての対応について、それぞれ実際の事例に基づいた説明があり、参加者はその対処方法等について理解を深めました。

また、31日（水）の研修会では、人権（セクハラ）担当の村瀬聡美総長補佐から、セクハラ防止体制について説明があった後、鳥井新子同相談所相談員からビデオ等を用いた分かり易い講習があり、参加者はセクハラ問題の基礎知識を学びました。

本学では、部局ごとに教員や学生を対象とした研修会も多数実施しており、今後も、研修会でのアンケート結果を活用するなどして、一層のセクハラ防止対策に取り組んでいくこととしています。



講演する角田弁護士



会場の様子

## 第3回国際業務職員トレーニングセミナーを開催

事務職員を対象とした国際業務トレーニングセミナーが、1月23日（火）、国際開発研究科オーデトリウムにおいて開催されました。同セミナーは、国際企画室及び国際教育交流協議会（JAFSA）の共催で行われており、3回目の今回は、「効果的な英文Eメール書き方のコツと実践」と題し、本学及び他大学の教職員、JAFSA会員など計66名が集まりました。

セミナー第1部では、マリーゴールド ホームズ日米教育委員会広報マネージャーによる講義が行われ、コミュニケーション全般における基本姿勢、Eメールの利点と注意

点、文章表現のマナー等の話や、英文での件名、本文、署名の書き方等を詳細に解説しました。事例や例文を豊富に織り交ぜた講義を通して、英文Eメールの書き方を基本から学ぶだけでなく、実際の業務においてすぐに利用できる表現等も多く得ることができました。

第2部では、筆内美砂留学生センター助手の進行により、実践例を使ったグループディスカッションが行われました。まず、3つの場面設定に沿って一部の参加者が作成した文案を参照し、それに対し、ホームズ氏がコメントをしました。その後、5名ほどの小グループに分かれて、各文案の良い点やより効果的な書き方などについて、講義で学んだことを参考に話し合いました。最後は、参加者と講師との質疑応答を行い、英文Eメールについて日頃疑問に思う点などについて、ホームズ氏からの的確なアドバイスがありました。

本学では、今後も国際化の一環として、実践に役立つ研修を行っていく予定です。



グループディスカッションの様子



講義するホームズ氏

## 惑星からの手紙 ー氷の科学ー

奥地 拓生 大学院環境学研究科助手／高等研究院教員

氷は過去100年にわたって科学者を魅了してきた、基礎研究の重要な題材です。今から70年の昔のこと、北海道で行われた雪の結晶形態の研究が、「雪は天から送られた手紙である」という、世界へと響く格調高い言葉を生み出しました。それ以後にも、雪と氷の科学においては、日本の研究者は世界的成果を継続的に提出しています。私はいま「氷は惑星から送られた手紙である」という共通の構想のもとに、さらに進んだ氷の科学を、北海道から九州までの各地の研究者とともに作り上げようとしています。

過去の雪氷科学は、もちろん気象学と不可分の存在でした。これに対して我々は、惑星科学と不可分の存在として、氷を捉え直しています。宇宙空間に最も大量に存在する固体は、岩石でも有機物でもなく、実は氷です。そして宇宙から惑星の内部にわたる、惑星の形成・進化の場には、真空極低温から高温超高压までの、あらゆる条件が実際に存在しています。氷を主成分とする惑星物質が、この多様な条件に対応して、実に多様な性質を示すことが、いま次々と明らかにされているのです。

話は少し専門的になりますが、たとえばお湯の沸騰を微視的に見ると、水分子間の化学結合(水素結合)が切断される現象です。物質の性質の大きな変化は、この沸騰のように、分子間の相互作用が変わることで起こることが多いのです。そして分子間相互作用は、私の研究のキーワードである圧力によって、分子間の距離を無理やりに縮めると、必ず変化します。特にギガパスカル(GPa; 約1万気圧)を単位とする超高压の領域では、まさにこの理由による根本的な性質の変化が頻繁に起こります。今では私一人になってしまいました

が、かつて名古屋大学が、この圧力によって起こる、地球惑星の内部物質の性質変化の研究で一世を風靡した時代がありました。

さて、圧力がもたらす物質の変化のなかでも、最も劇的な実例のひとつが氷の変化です。氷の分子をつなぐ水素結合には高い柔軟性があるため、外場に対応した構造変化を次々と起こします。高压の氷には今わかっているだけでも17種類の異なる構造がありますが、さらに数十万気圧の圧力をかけると、分子間距離の限界を超えた圧縮により、本来は区別されるべき分子の内と外の結合が混ざりあい、ついには酸素と水素がばらばらに混じったイオン性の氷がつくられます。太陽系の外側にある巨大氷惑星の内部につくられた、超高压



図1 NMR用超高压力発生装置

高温の世界においては、この異常な氷が実際に存在する可能性があります。さらに、いま発見が相次いでいる太陽系外の惑星の数（07年2月現在で212個）を考えると、可能性はさらに広がります。それこそ星の数ほどが存在する系外惑星の内部には、惑星の大きさに応じた異なる圧力の下で、分子からイオン、さらには金属へと性質を変化させた、多様な氷が存在します。

このような氷の変幻自在な変化を、NMR（核磁気共鳴分光）という分子を調べる最終兵器ともいえる強力な手法を使って調べるべく、数十万気圧の下でその測定ができる装置を、ゼロから作り上げました（図1）。実験方法は単純で、ダイヤモンドではさんだ氷を圧縮して押しつぶしてから、ダイヤモンドに通した細いワイヤーを使ってNMR分光を行います（図2）。ダイヤモンドは強く、圧力の発生は問題なくできるのですが、圧縮した極微量の試料から、もともと微弱なNMR信号を取り出すことが実に難しい作業でした。こ

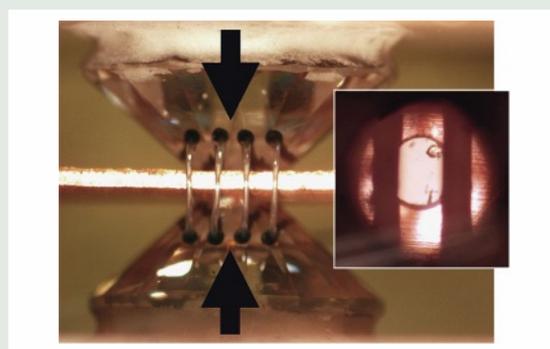


図2 ダイヤモンドとNMR観測コイル。コイル線は直径75ミクロン。黒い矢印が圧縮方向を示す。中央の水平な金属薄板に穴をくりぬいて試料を封入している。右写真は、金属薄板内の穴に封入した試料を、ダイヤモンドを通して左写真の上部方向から観察したところ。

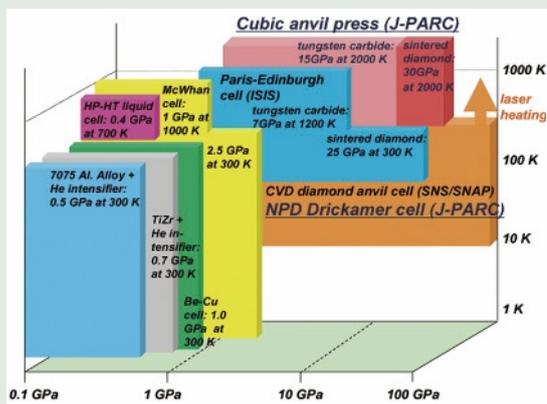


図3 高温高压中性子散乱装置の種類。横軸が圧力、縦軸が温度を示す。茨城県東海村に建設中の大強度陽子加速器計画（J-PARC）の物質生命科学研究所施設の中に、ピンク色、橙色で示した二種類の装置を直列に置く計画を進めている。この二台が揃えば、世界最高温度、圧力の条件での中性子を使った測定が可能になる。

の新しい装置の試運転を兼ねて、メタノール、水素ハイドレートなどの氷の親戚の物質を高圧で調べてみたところ、その驚くべき性質が次々と明らかになってきています。ご興味のある方はウェブサイト等を参考にして戴きたく思います。

惑星の氷を本当に理解しようとするとき、NMRだけではまだ道具が足りません。そこで、同じぐらい強力な手法である中性子散乱を、高圧下で自在に駆使するための装置を、これから作ります（図3）。これはもちろん私一人の仕事ではなく、各地の氷物性研究者、および地球惑星内部研究者との共同作業です。高圧下において世界でも最も広い温度範囲をカバーできる、このユニークな装置が完成すれば、「惑星からの手紙」を覗き見るために、世界中から氷の研究者が集まってくるでしょう。

1998年東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了。北海道大学低温科学研究所を経て、同年名古屋大学理学部助手、2001年より大学院環境学研究科助手。その後、ワシントンカーネギー協会地球物理学研究所、カナダ国家研究機構（NRC）客員研究員。2006年より高等研究院教員。  
URL: <http://www.eps.nagoya-u.ac.jp/~okuchi/>

おくち たくお



# メディアリテラシーの実践的な養成の試み

後藤 明史 情報メディア教育センター助教授

## テレビくらい見なさい

入学したばかりの1年生に、「毎日のニュースを主にどうやって知りますか」と尋ねると、テレビとインターネットがほぼ同数、新聞がごくわずか。例年こんな感じです。今年、ニュースは友人から聞くと答えた学生がいました。話を聞いてみると、そもそも下宿にはテレビがなく、欲しいとは思わなかったとのこと。若者は活字離れから、すでにテレビ離れの段階にあるようです。



## 新聞も読みなさい

こういう学生に、新聞をどうしたら読んでもらえるのか。そこでTAに新聞の切り抜きを作ってもらい、これを読むことを学生と私の宿題としました。記事の選択は連載、解説、特集記事を中心に選び、時事ネタは学生とつながりが深いものに限りしました。1週間分で20の記事を選んで渡しました。



情報メディア教育センターのメディアスタジオでの基礎セミナーの様子

## メディア体験を共有しよう

学生も興味はいろいろです。自分が面白いと思うビデオを持ち寄り、見ることにしました。ビジュアル系ロックバンドの演奏や、売り出し中のお笑いコンビの漫才を見ました。私も感動したドキュメンタリーを見せたりします。

もう1つ重要な体験は放送局の見学です。見学ルートではなく、無理を言ってスタジオや調整室にお邪魔します。タレントさんの華やかさやスタッフのピリピリとした雰囲気が大変よい刺激になります。同時に、これくらいなら自分たちでもできるかもしれないという手応えを感じてもらえることを期待しての見学です。

## テレビ番組をまねしよう

ここからが授業の本番です。新聞の連載記事で、物事を多面的に見たり、深く見たりする良い例に触れています。すでに学生同士は仲よくなっていますし、放送局の見学で気分も盛り上がっています。また、この段階までにはビデオの撮影や編集などの技能は最低限のことが出来るようになっていきます。

NHKの情報番組で「クローズアップ現代」という番組があります。ニュース解説的な内容から、ニュースになりにくい話題まで、ビデオ取材とそれを受けたキャスターと専門家によるトークで構成されています。この「構成」をまねして、自分たちで選んだテーマで番組を作り上げていきます。

まず、企画構成と取材を同時並行で進めます。インタビュー、アンケート、ゲスト、取材対象は…。

どうすれば見る人に伝わるか。自分たちで発した問いに、自分たちで回答していきます。

名古屋大学は専門家の宝庫です。お会いしたことのない先生にアポを取り、カメラ取材をする等スタジオ出演交渉をします。そして、ビデオ取材の編集ができれば、スタジオ収録です。キャスター役はもちろん学生です。

## この授業で得られるものは

最近も健康情報番組で問題になりましたが、テレビ番組は事実とは無関係に制作者の意図通りに作れてしまいます。言葉ではよく言われることですが、実際に制作する側に回ると、テーマ設定、カメラワーク、映像編集、BGM、取材対象、インタビュー内容そして番組構成とあらゆる場面で自分の判断が番組の方向性に大きく影響を及ぼすことに直面します。学生はよくこう言います。「こんなんでいいの?」そう、こんなふうに作っているんです。このメディアリテラシーと同時に、仲間とプロジェクトを成し遂げる達成感を味わってくれば、授業を担当した甲斐もあるというものです。

これまでに、「名古屋は本当に元気なのか?」、「大学で学ぶとは」、「大学生はなぜ眠い」、「働くことの意義」という番組を作ってきました。手前味噌ですがなかなかのビデオ番組ができ上がっています。今期は「大学生の恋愛」をテーマに番組制作をしています。さてどんなものができあがるのか、大変楽しみです。

1963年生まれ。1986年名古屋大学教育学部卒業。1990年名古屋大学総合言語センター助手を経て、1998年名古屋大学情報メディア教育センター助教授。  
専門は、教育工学。  
使わないのに興味があることはペン入力。MacHandWriter、Zaurus、Palm、TabletPC、どれも手を出した。

ごとう あきふみ



# 見せて魅せる「名大の授業」

中井 俊樹 高等教育研究センター助教

## 授業内容の公開は世界的傾向

自分と同じ専門分野の教員はどのように授業を進めているのだろうと思ったことはありませんか。このような疑問は、担当している教員や受講している学生に直接聞かなくてもある程度は解決するようになりました。多くの大学においてインターネット上に授業のシラバスが公開されてきたからです。最近ではシラバスだけでなく、講義ノートや試験問題も公開している授業が増加し、これまで以上に大学教員の授業内容がよく見えるようになっていきます。

組織的に授業内容の公開に踏み切った最初の大学は、マサチューセッツ工科大学だと言われています。マサチューセッツ工科大学が、2002年に「オープンコースウェア (OCW)」というサイトを立ち上げて以来、大学の授業内容の公開は世界的な傾向になりつつあります。オープンコースウェアの国際コンソーシアムには、現在16カ国の100機関以上の大学が参加しています。

## 「名大の授業」の特徴

名古屋大学でも、個々に授業の内容をインターネット上で公開している教員もいましたが2005年12月に大学として共通の形式で授業の内容を公開するサイトができました。それが、「名大の授業」です。授業の内容をインターネット上で公開することで、名古屋大学の教育活動を、広く情報発信しようとするものです。「名大の授業」の中では、各授業の授業概要、シラバス、スケジュール、講義ノート、課題、成績評価、学習成果、参考資料、授業の工夫、授業紹介ビデオなどが公開されています。特に、教員の創意工夫をまとめた「授業の工夫」と教員自身の言葉で語る「授業紹介ビデオ」は、他大学のサイトではあまり見られない「名大の授業」独自の取り組みです。

「名大の授業」には、毎月約8千人の訪問者がアクセスしています。現在、学内の32の授業の内容が公開され、随時追加される予定です。授業内容を公開する学内教員も引き続き募集しています。また、本年2月にはホームページのデザインも新しくなりました。「名大の授業」にアクセスしてみれば、名古屋大学の豊かな教育活動の一端を体感できるはずです。



「名大の授業」ホームページ <http://ocw.nagoya-u.jp/>

## 授業内容の公開の先に

これまで大学の研究活動は論文や本となって公開されていましたが、教育活動は教室外の人に対して十分に公開されていませんでした。「名大の授業」において公開される授業内容は、大学教員の共有の財産となり、それぞれの教育活動の質を向上させる貴重な情報源になるでしょう。

また、「名大の授業」は、社会への情報提供としても意味があります。NTT レゾナント株式会社と慶應義塾大学が一般の人々を対象に実施したアンケートによると、約8割の回答者が、授業内容を公開している大学の取り組みを肯定的に評価し、公開された情報を利用したいと考えています。大学がさまざまな人々に愛され、支援されるためにも、その活動内容を広く公開することは今後ますます必要となるでしょう。

高校に対する情報提供としても、「名大の授業」は重要な取り組みになるでしょう。今まで大学は、高校に対して入試関連以外で十分に情報提供できていなかったのかもしれませんが。「名大の授業」において教育内容を見て、名古屋大学を志望する学生がキャンパスに増えるのも近い将来ではないかと思います。

「名大の授業」に関する問い合わせ先  
〒464-8603 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学 情報メディア教育センター内  
OCW 事務室  
電話：052-789-3904  
電子メール：  
nuocw-inquiry@media.nagoya-u.ac.jp

教養教育院	英語（リーディング）4 英語（リーディング）2 朝鮮・韓国語 1 ドイツ語 1 ロシア語 2 基礎セミナー A （民法の世界で遊ぶ） 基礎セミナー A （図書館と情報を使いこなす） 基礎セミナー A （ボードゲームを究める） 科学・技術の哲学 文系基礎科目（法学） 全学教養科目 （未来の大学像をつくる） 力学 I
文学部・文学研究科	ポスト・ローマ期ヨーロッパの表象構造 中国西南の民族と歴史
教育学部・教育発達科学研究科	教育方法学講義 II
法学部・法学研究科	民法 II 情報と法
経済学部・経済学研究科	経済理論 I 管理会計
情報文化学部	統計分析 物質情報学 2 複雑系科学演習 1
理学部・理学研究科	宇宙物理学 γ
工学部・工学研究科	情報通信工学第 2 解析力学及び演習 離散数学及び演習
農学部・生命農学研究科	生命農学基礎講義 資源植物環境学
情報科学研究科	適応システム特論
国際開発研究科	言語教育工学
多元数理科学研究科	数理解析・計算機数学 I
国際言語文化研究科	ジェンダーとセクシュアリティ

2007年2月現在公開されている授業一覧

名古屋大学オープンコースウェア委員。

1970年三重県松阪市に生まれ、1998年名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程中途退学、1998年名古屋大学高等教育研究センター助手、2003年同センター助教授となり現在に至る。大学では学生は何を学ぶべきか、そしてどのような条件で学生はより学ぶのかということを研究しています。

好きな言葉：「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを面白く」（井上ひさし）

趣味：職員バレーボール部（新入部員を募集するように言われています）、ワインの会、映画鑑賞会

なかい としき



# 名大の自然と歩む —名古屋大学生物研究会—



鏡ヶ池でバードセンサス中の部員たち

『自然の中で多くの生き物と出会えるサークル。自然や生き物が好きな人たちが集まるサークル。』それが、私たち名古屋大学生物研究会です。「自然や生き物が好きな人たちが集まる」と聞くと、部員は生き物に詳しい人ばかりのように感じるかもしれませんが、決してそんなことはありません。自然散策や風景を眺めることが好きな人、文系の人、理系の人などいろいろな人が所属しています。

生物研究会は1971年6月に誕生し、今年で35年目を迎えました。活動はバードウォッチングや昆虫採集、植物観察などの自然観察や自然散策が主ですが、それらの中で大きなものとして「バードセンサス（鳥セン）」、「合宿」、「名大祭展示」の3つがあります。鳥センは、月に一度、名大構内で行われる野鳥の生息数調査のことで、約30年途切れることなく続いています。この活動では、調査と同時にバードウォッチングや昆虫、植物の観

察も行っています。合宿では、山や海など自然豊かな場所で多くの生き物や自然と触れ合っています。また、名大祭の展示では、鳥センの結果報告や合宿で出逢った生き物の写真、名大構内で採集した生き物などを展示しています。

さて、2007年1月23日から2月24日までの一ヶ月間、第10回名古屋大学博物館企画展「名大キャンパスの野鳥」が開催されました。その企画展で展示された48種の野鳥の写真は、部員の有志が撮影したものです。写真を提供した部員は、企画展の準備が始まった2年前から名大内で野鳥を撮り続けてきました。また、鳥センのデータの提供でも貢献いたしました。そのデータからは29年間の野鳥の増減が分かりますが、さらにその背後にある、名大の環境の変化を知ることができます。今回の企画展に来てくださった方々に、少しでも名大の自然の豊かさや遷り変わりを知っていただけたのならば、幸いです。

名古屋大学は名古屋市内でも豊かな自然が残っている場所ですが、その自然も年々少なくなってきました。このことは、これまで私たちが行ってきた鳥センのデータや自然観察の結果からも見て取ることができます。名大の自然を知る上で、これらのデータは貴重な財産となっていくでしょう。私たちは、これからも鳥センや自然観察を続け、データだけでなく多くの自然も後世に繋げていけたらと思っています。



第10回名古屋大学博物館企画展「名大キャンパスの野鳥」の展示風景

まつだ まなぶ  
1985年 富山県出身

## 多くの人に支えられて、いざ、角界へ！

工学部化学・生物工学科4年  
田中 周一（しこ名：舛名大）



記者会見の様子（左は、千賀ノ浦親方）

子供の頃は、プロ野球選手になることが夢でしたが、その夢は早々と諦めて、高校時代は水泳部に籍を置いていました。相撲との出会いは、名古屋大学に入学し、学内の相撲大会に軽い気持ちで出場したことです。その結果、相撲部の人に眼をつけられて、執拗な勧誘攻撃に遭い…、最後は勧誘に負けて入部したと思われることが嫌で、「自分の意志」で入部しました。

相撲部では、全国国公立大学対抗相撲大会の団体戦で二連覇。決してメジャーなタイトルとは言えませんが、我が相撲部にとっては快挙であり、自分にとっても角界に進むきっかけになったとも

言える出来事で、とても印象に残っています。

千賀ノ浦親方から角界へのお誘いを受けた時は、正直迷いました。大相撲の世界で自分の力を試してみたいという気持ちと、もし通用しなかったらという不安な気持ちの葛藤がありました。そんな時、母の「自分の人生なんだから、やりたいことをやればいい」という言葉が後押しとなり、角界入りを決心することができました。

角界入りが決まり初土俵を迎える前、平野総長から「名大の名前をしこ名につけてくれて本当にうれしい。身体に気をつけてがんばってください」と、激励を受けました。その時、自分もいずれは大観衆の前で、「舛名大」のしこ名を背負って相撲をとり、名大の名前を全国に広めたいと思いましたが、初土俵での優勝決定戦で、それが実現するとは思ってもみませんでした。通常、序の口の取組は、観客もまばらな午前中に行われるのですが、優勝決定戦だけは、千秋楽の幕内の取組直前、大勢のお客さんの見守る中で行われるのです。結果的に優勝は叶いませんでしたが、いい経験になりました。

これまで多くの方々に支えられて、相撲人生のスタート地点に立つことができました。ますます精進し、出世することにより皆さまに恩返しすることができたらと心から思っています。



平野総長を表敬訪問して

たなか しゅういち（しこ名：ますめいだい）

愛知県岡崎市出身

平成18年11月、国立大学出身者では、史上3人目の大相撲力士となる。旧帝国大学出身者としては初。初土俵の平成19年1月場所において、6勝1敗の成績で、序の口優勝決定戦に進出。惜しくも優勝は成らなかったが、2月に序二段（東62枚目）に昇進。

# 愛知県農業総合試験場と研究協力に関する協定調印式を挙

●大学院生命農学研究科

大学院生命農学研究科は、1月19日(金)、環境総合館レクチャーホールにおいて、愛知県農業総合試験場と研究協力に関する協定を締結し、調印式を挙りました。

同研究科と同試験場では、昭和26年に農学部(大学院生命農学研究科の前身)が、大正9年に創設された農事試験場本場(愛知県農業総合試験場の前身)と同じ安城市に創設されたことから、緊密な人の交流が行われており、これまでに数多くの研究を共同で実施し、発展させてきました。本協定は、同研究科の農学、生命科学関連の基礎的分野における研究実績と、同試験場の農業生産現場に密着した応用技術に関する情報量を活かしながら、相互補完的な協力関係をさらに強固にし、互いの発展並びに当地域における学術の発展及び農業の振興を図るために締結したものであり、具体的には、(1)最新科学技術に関する情報交換、(2)共同研究等の実施、(3)研究者、研究員の交流と人材育成、(4)研究資源の相互利用、を行っていきます。



協定書に署名する松田研究科長(左)と石本試験場長(右)



堀江理事長による記念講演の様子

調印式では、100名を超える出席者の中、松田同研究科長と石本佳之同試験場長が協定書に署名、あいさつをした後、山本理事及び来賓の小栗邦夫東海農政局長、平光孝司愛知県農林水産部技監から祝辞がありました。その後、加藤 保愛知県農業総合試験場企画普及部長より、同研究科と同試験場の連携の歴史と研究連携協定の具体的な内容について詳しく説明があり、調印式を終了しました。

引き続き行われた記念講演会では、堀江 武独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構理事長より、「農業研究の現状と今後の方向—大学と農試の研究連携に期待するもの—」と題する講演がありました。堀江理事長は、今世紀の農業に課せられた課題として、いっそうの食糧増産に加え、環境保全に貢献しうる新しいエネルギー生産技術の開発を挙げ、大学の基礎研究と同試験場の現場型技術の相乗的な発展がますます重要になってきている中、今回の連携協定には大きな意義がある、と話しました。



協定締結後、握手する松田研究科長(左)と石本試験場長(右)

## 韓国 済州青年訪日研修団が文学研究科を訪問

大学院文学研究科は、1月15日(月)、韓国の済州青年訪日研修団一行15名の訪問を受けました。これは、日韓両国政府により策定された日韓学術文化青年交流事業の一環で、韓国 済州道内の六大学から選抜された大学生と本学学生との交流を図り、相互理解の進展に寄与することを意図したものです。

同研修団は、1月13日(土)から愛知県豊明市内で2泊3日のホームステイを行った後、本学を訪問し、附属図書館、赤崎記念研究館、野依記念物質科学研究館を見学の後、グ

リーンサロン東山等を会場にして、文学部の学生15名と懇談を行いました。

済州道は、済州島と周辺の島々からなる韓国南部の観光地として知られており、気候も温暖で、ビザなしで渡航が可能なことから、日本人観光客が数多く訪れている所です。同研修団の学生たちも観光学科で日本語通訳を目指している者が多く、日本の実情を肌で感じながら学ぼうとする意欲が強く伝わってきました。

学生たちによる小グループに分かれての懇談では、すぐにうち解けて話題も途切れることがないようにでした。同研修団の学生は、それぞれが思い思いに準備してきた小さな贈り物と、自身の名前とメールアドレスを記入した紙片を準備しており、積極的に自己アピールを行っていました。



歓迎のあいさつをする町田研究科長



研修団と同学部学生との交流の様子

## 名大附三者フォーラムを開催

●教育学部附属中・高等学校

教育学部附属中・高等学校は、2月10日(土)、同校第1総合教室において、名大附三者フォーラムを開催しました。これは、同校の生徒、保護者、教員の三者が、それぞれ同じ立場、目線で附属学校をより良くしていくために意見を出し合い、話し合うことを目的に、今年度初めて行われたもので、学校経営・学級経営を研究している植田健男教育

発達科学研究科教授の研究室と協力し、同研究室の学生も積極的に参加することで、研究フィールドにもなっていることが、大きな特徴です。

今回は、「名大附の学校祭をアピールするには～光粒祭の振り返りから～」というテーマで、約2時間にわたり活発な意見交換が行われ、次回のテーマ例として、「学校の授業にのぞむものは何か」、「中学、高校時代に一番育まなければならないものは何か」、「名大附属ならではの教育は、学力は」といった具体的なものから「名大附属のあり方」といった幅広いものまで、多くの提案があり、参加者のこのフォーラムに対する関心の高さが伺えました。今後とも同フォーラムを継続していく意思を確認し、終了しました。



フォーラムの様子

## 地域貢献特別支援事業による地方自治体との連携事業を実施

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、地域貢献特別支援事業「開発学を用いた地域資源利用の地域振興社会実験事業」の一環として、昨年9月から本年2月にかけて、長野県泰阜村と長崎県小値賀町において、自律振興事業と連携した活動を実施しました。

小値賀町では、昨年9月23日(土)、24日(日)の2日間、教員と大学院学生(留学生と日本人各2名)が、町の住民が提案しJICAが実施した研修プロジェクトである島の資源把握ワークショップに参加し、1月13日(土)には、役場



JICAワークショップで住民、研修員と作業する大学院学生



ふるさと議会で市議会議員らと討論する大学院学生

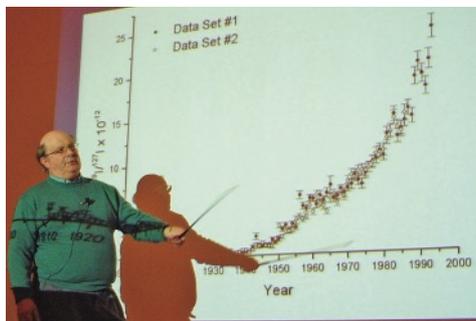
の自律振興班の主催で、島外に住む出身者が未来について議論する「ふるさと議会」にも参画しました。同町は、人口約3,000人の小さな自治体でありながら、離島であることを大きな理由に、住民投票によって本土の都市との合併を見送り、町のほぼ全域が西海国立公園に位置することなどを利した独自の地域振興を目指しています。

参加したメンバーは、開発学を研究し学ぶ立場と、外部者である一人の市民という立場の両方から、JICA研修員と住民とのコミュニケーションに助言したり、再発見された文化や歴史など、地域の様々な資源をどのように活用するかというワークショップ作業に加わったりしながら、住民とともに学びました。地域の持つ多様な課題への取り組みや、地域資源の活用における住民の役割と外部者としての開発専門家の介入には、開発途上国と国内の地域とで共通のものがあることに気づいたようでした。

## 年代測定総合研究センターが国際シンポジウムを開催

年代測定総合研究センターは、1月15日(月)から17日(水)の3日間、シンポジオンホールにおいて、「International Symposium on Radiometric Dating Studies」と題した国際シンポジウムを開催しました。

初日は、板谷徹丸岡山理科大学教授、M. サントツシュ高知大学教授、K.H. キム梨花女子大学教授及びD.J. ダンクリー国立極地研究所研究員による招待講演を始め、CHIME年代測定法に関する講演とポスター発表が行われました。



講演するジュル教授

2日目は、W.E. キーザー トロント大学教授、A.T. ジュルアリゾナ大学教授、W. クレッチマー エアランゲン大学教授、米田 穰東京大学助教授による、AMS年代測定法に関する招待講演が行われました。

3日目は、第19回名古屋大学年代測定総合研究センターシンポジウムが開催され、自然科学から人文科学に至る幅広い分野の研究者や一般の方が多数参加しました。

期間中、研究者及び学生、一般の方など併せて72名の参加があり、多くの研究分野において、年代測定法が重要な役割を果たしていることが確認できました。



講演するキーザー教授

## 留学生のための就職支援セミナー（第4回）を開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、1月16日(火)、同研究科多目的オーディトリウムにおいて、留学生のための就職支援セミナーを開催しました。

今回は、本セミナーの最終回にあたる第4回目で、マツダ株式会社勤務の孟 科氏（同研究科修了）、日本企業での勤務経験が10年以上で、現在、林テレンプ株式会社勤務

の李 弘氏（鹿児島大学大学院修了）より、日本への留学の経緯、日本企業への就職の経緯など、日本で就職を考えている留学生へのアドバイスを盛り込んだ講演が行われました。

講演では、留学生の就職には日本語能力が必須であり、就職後もそれを磨く努力を怠らないことの重要性や、外資系企業に比べ日本企業が社員教育や研修に熱心であること、また、グローバル化にともない日本企業が大きく変化していることなどについて、説明がありました。質疑応答では、参加者から多くの質問があり、留学生の日本企業での就職状況だけでなく、最近の日本企業のあり方についても、大いに理解が深まる有意義なセミナーとなりました。



講演する孟氏

## 地震発光現象ワークショップを開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センターは、1月26日(金)、環境総合館レクチャーホールにおいて、地震発光現象ワークショップ「どうして光るのか? -地震にともなう発光現象をさぐる-」を開催しました。

まず、独立行政法人海洋研究開発機構の阪口 秀氏から、阪神淡路大震災時において自宅で目撃した発光現象の詳細

な報告がなされ、現象の空間的、時間的スケールに多くの関心が集まりました。続いて、中部大学地球ウォッチ・市民安全センターの井筒 潤氏が過去の同様な観測例と研究の歴史について、鴨川 仁東京学芸大学教育学部助手が目撃情報と人為的要因の可能性も含めたその原因と考えられる物理現象について、加藤 護京都大学大学院人間・環境学研究科助手が、室内での岩石の破壊実験についての講演をしました。

体験談に始まり、理論、観測、さらには室内実験といった幅広い内容について講演が行われた今回のワークショップは過去に例のない試みで、多くの参加者から質問、意見が出されるなど、目撃情報と物理現象との対応について活発な議論が行われ、大変有意義なものとなりました。



会場の様子

## 平成18年度先端技術共同研究センターオープンフォーラムを開催

●先端技術共同研究センター

先端技術共同研究センターは、1月15日(月)、ベンチャービジネスラボラトリーにおいて、大学院工学研究科、財団法人日比科学技術振興財団との共催で、オープンフォーラム(テクノシンポジウム)を開催しました。

今回のオープンフォーラムは、「人と機械の健康的共生をめざして」をテーマに掲げた同フォーラムのキックオフ



講演するトヨタ自動車(株)渥美氏

として、疲労やストレス、睡眠といった健康に影響を及ぼすと考えられる事項について、産学、医工それぞれの分野において第一線の研究・開発に携わっている専門の研究者の考え方を紹介することで、人の健康にマッチした機械のあり方を見つめていくことを目的に開催されました。

講演は、人が実際に機械を扱うときに受けるストレスや疲労とその対策に関するもの、極めて主観的な「ストレス」や「疲労」を客観的に測定・評価するための手法に関するもの、疲労やストレスに関係の深い睡眠とそれに基づく眠気予防に関するものと多岐に渡っており、様々な観点から非常に有意義な議論が行われました。

学内外から集まった約50名の参加者は、丁寧でわかりやすい講演に熱心に耳を傾けており、講演終了後も活発に質疑応答をしました。

今後も同テーマを基調とした講演会の開催を行っていく予定です。

## 博物館が中学生の職場体験学習を受け入れる

博物館は、職場体験学習として、2月1日(木)、2日(金)の2日間、牧の池中学校2年生3名を受け入れました。

初日は、博物館教員から、博物館の概要及び現在開催している第10回企画展の展示解説を受けたり、研究室で、標本(古い一般機器)の写真撮影や標本番号のタグを付ける登録作業などに取り組みました。



職場体験学習を行った中学生

2日目は、博物館の開館前の準備として、ショーケース等の清掃、機材の立ち上げを行った後、来館者へ配布するための資料の準備やアンケートのパソコン入力をしました。標本の運搬作業では、約40箱の重い段ボールを3名で協力して、手際よく階上へ運び入れ、汗を流していました。中学生からは「博物館には、外からはわからない色々な仕事があるんだなあ」という感想が聞かれました。

博物館では、地域貢献及び次世代教育の観点から、今後も職場体験学習を受け入れていく予定です。

## 第10回博物館企画展「名大キャンパスの野鳥」を開催



第10回企画展を見学する来場者

博物館は、1月23日(火)から2月24日(土)までの1ヶ月間、第10回企画展「名大キャンパスの野鳥」を開催しました。

東山キャンパスでは年間およそ50種類の野鳥を観察できます。本企画展では、名古屋大学生物研究会の有志がここ2年間に撮影した東山キャンパスに生息する野鳥の写真を中心に展示しました。47種類の野鳥を同キャンパスでの生息環境により分類し、野鳥と生息環境の関連が理解できるよう工夫された展示や、同研究会が過去30年間にわたり行ってきた同キャンパスでの野鳥生息数調査からわかった、飛来する野鳥の増減を紹介したコーナーが設置され、関心が集まりました。また、鳥の声を聴いてみる体験コーナーや鳥に関するクイズのコーナーも人気を博し、来館者の多くは、大学のキャンパスに多くの野鳥が飛来している事実に驚きの様子でした。

1月26日(金)には、同館講義室において、本企画展に関連した「第67回特別講演会」が開催されました。元生物研究会部員の佐藤紳司理学研究科助手が、「都会で暮らす鳥たちの背景」と題し、東山キャンパスでの鳥の棲み分けの実例を挙げ、ある野鳥が生きていくためには自然環境とえさが大切であり、それは鳥の種により異なるという法則を

知ることが大切であること、観察ではどんな鳥がどんな環境に適応しているかを見るのが大事であることを紹介しました。さらに、同キャンパスでの過去30年間の自然環境の変遷に伴う野鳥の観察数の変化が解説され、同キャンパスの自然環境の復元の重要性に話が及びました。一般の方を中心に約100名が参加し、講演終了後は活発な質疑応答が行われました。

2月10日(土)には、東山キャンパス内において、本企画展に関連して「キャンパス探鳥会」が行われました。参加者は同キャンパス内のコースを2時間歩いて野鳥を観察し、案内人としてボランティアで参加した佐藤助手や生物研究会の部員及び元部員から、野鳥と生息環境について説明を受けました。雑木林ではメジロ、ヤマガラ、カケス、シジュウカラ、コゲラなど、鏡ヶ池ではマガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、カルガモ、カワセミなどを観察し、野鳥の生息環境と野鳥の種類について理解を深めました。一般の方を中心に64名の参加があり、参加者の多くは東山キャンパスの豊かな自然に感動した様子で、次回の探鳥会への期待が高まりました。



第67回特別講演会の様子



キャンパス探鳥会の様子



## 退職にあたって

竹内 弘行 大学院文学研究科教授

平成12年に名古屋大学に転任し、七年間にわたって文学部・文学研究科にて教育と研究に携われたのは、私には望外のことで、この上ない喜びを感じております。

この間、大学は、周知のとおり、大学院重点化・法人化・学部棟の耐震改修などで、内外ともに大きく変貌を遂げました。こうした改変や整備は、かつての泰然自若とした「学問の府」と言ったイメージからは、ますます遠ざかるように思えますが、名古屋大学が学術研究の最先端をゆく基幹大学として新たに羽ばたくには、避けては通れない道かも知れません。この時期に、大学を去ることができるのは、それなりに好かったのかな、とも思えます。

中国の古典書に、「人生三分説」というのがありました。人生の最初の三分の一は養育期、次の三分の一はその養育に

報いる労働期、最後の三分の一が、その人の思いのままに出来る自由な時期と言うものです。

私にとっては、三十歳で大学院を離れるまでが最初の三分の一、この定年までが次の労働期、そしてこれからの人生が、やっと自由な時期になるか、と思われまふ。こうした古人の知恵に従えば、これからが、真の自分の人生かもしれない。いや、そう信じて新しい生活に臨みたいと思います。

最後になりましたが、名古屋大学の益々のご発展を心から祈っております。



## 44年前の大学環境を思う

高木 靖文 大学院教育発達科学研究科教授

私が入学した昭和38年頃の名古屋大学は、60年安保の余燼が爛り、自治会活動が異様に高まりを見せていた。教養部は、授業開始後数週間で、自治会やサークル関係のビラがあらゆる壁を占拠し、剥ぎ取られた紙を避けて歩かなければならない有様であり、雑然として、喧噪の中にあった。一方、授業はというと実に大らかで、毎時間自分の生い立ちを語る数学者、将棋とチェスの話を枕にする英文学者、自宅に飼っているリスの生態観察を報告する心理学者、「古文書」のようなセピア色のノートを読み上げ筆記させる歴史学者、最新の研究成果を文系学生相手に淡々と伝える物理学者など、教養教育とは何かを考えさせる反面教師が少なくなかった。律儀に時間通り教室に飛び込んでくる教官もいたが、いつまで待っても姿を見せない豪傑、「優」を出さないことを誇りに

している(らしい)変人など、今のような授業評価があれば到底堪えられない懐かしい名物教師で溢れていた。

校舎が今の場所に移転して間もない頃であったから、グリーンベルトは雑草の生い茂る空き地であったし、学内の道路は雨が降るとめかるんで誰の靴も赤土で汚れた。学生の方も、歌と踊りに明け暮れ、流行りの学習会に籍を置き、拘束されない生活を謳歌した。

状況としての「自由」を恐れた私のように、図書館と古本屋に身を潜める不健康な学生は、多分少数派であったと思う。今は昔。静謐・快適な環境で学ば後輩に次代を託したい。



## 附属学校長をお引き受けして

豊田ひさき 大学院教育発達科学研究科教授

平成16年8月、私は大学院教育発達科学研究科のカリキュラム学講座教授として名大に赴任しました。着任に当たり、名大というアカデミックな研究雰囲気の中で、カリキュラムを授業実践レベルで開発するミクロな研究に専念できると胸を弾ませました。ところが、赴任後1年も経たない内に、突然教育学部附属高等学校長職に推挙されました。専攻の関係上、学校経営等についても外からいろいろ注文を出す論評は書いたことがあるのですが、いざ自分がその職についてみると、その職責の煩雑さ、多忙さに圧倒され続けました。

学校の教職員が協働して授業研究ができる、そこに私も協働研究者として日常的に参加できるような理想のフィールドが与えられたと最初は内心随喜したのですが、現実はその甘くはありませんでした。授業研究に参加させてもらう以前に

処理しなければならない職務が多すぎたのです。もちろん、これは私の力の無さがその第一の原因です。しかしそんな中、力の無い私にでも、微々たるコトにしろできることがある、ということ学ばせてもらったのも、学校長という職でした。その意味で、附属高等学校は、私の「学校」でした。定年間際に、この「学校」を与えてくださった名大大学院教育発達科学研究科に衷心より感謝申し上げます。最後の「学校」で学ばせていただいたことを糧に、これからも自分の研究を深化させていく所存です。ありがとうございました。



## 名古屋大学型夢プランに向けて

北住 炯一 大学院法学研究科教授

私が名古屋大学に赴任したのは1986年4月のことである。当時は教員仲間でテニスやスキーを楽しんだものであったが、今やそうした心のゆとりもなく、牧歌的状况は想像すらできない。大学は象牙の塔との言い回しもすでに死語と化し、これを語るのはあたかも時代錯誤のようである。いずれにしても、目下、歴史的転換点に立つ大学の将来像を描くことは容易でないが、しかし何か展望を見出したいというのも大学人共通の思いであろう。

そこで想起されるのが、近代日本の国づくりの範を欧米諸国に求め、1871年に横浜港を出帆した総勢46名からなる岩倉使節団のことである。彼ら少壮官僚が諸国から学んだように、名古屋大学もこうした外国使節団を組織し、彼の地の大学運営を綿密に調査し、日本の大学文化と欧米のそれを融

合した「名古屋大学発21世紀型大学システム」を大胆に打ち出してはどうであろうか。

名古屋大学創立70周年事業の「名古屋大学基金」募金活動が始まったが、70周年記念日には大学像を世に示すことを考えれば、使節団はそれに向けた一歩となるに違いない。見聞をもとに大学像を構想する節目では、新装の豊田講堂で直接民主主義的に構成員が意見をぶつけ合い、理想的にして現実的な「名古屋大学モデル」を練り上げるのも一つの試みかもしれない。

以上、大学を去るものの独り言であるが、ともかくも名古屋大学が研究教育の希望を託せる「夢空間大学」に発展することを心から祈りたいと思う。



## 統計学の結びつき

和合 肇 大学院経済学研究科教授

新設の筑波大学で教育・研究活動を開始して以来、多くの大学や統計数理研究所などの研究機関でいろいろなプロジェクトに携わってきた。またシカゴ大学、ウィーン工科大学、パーゼル大学等、海外で研究する機会を持つこともできた。この間知り合えた内外の研究者との交流なしには、現在の研究活動は成り立たなかったであろう。

1980年代初めに京都で開催された国際コンファレンスで研究仲間を得たことがきっかけでシカゴ大学で研究する機会を得て、そこでベイズ統計という当時あまり主流でない分野に関心を持った。現在ではファイナンス、ゲノム解析、環境、心理等多方面でその複雑現象に対する有用性が広く認知されるようになり、多くの国際学会でもベイズ統計を利用した報告が多く見られる時代となり、我が国でも関心を持つ研

究者は着実に増加している。ここ数年ベイズ統計を中心とする研究資金を利用した国際コンファレンスを10回近く開催し、若手研究者に発表・交流する場を提供してきた。

名古屋では、計算科学のCOEプログラムに参加し、他分野の方ともふれあうことができたが、そこで十分な貢献ができなかったことは心残りである。名古屋大学を辞するにあたり、大学の規模に比べ統計学を専攻する教官が少ないことが気になっている。工学、医学、農学いずれも実験データの扱いが重要な分野であり、ベイズ統計を含めた実際の統計学研究者の育成・充実が望まれる。



## 核研跡雑記

加藤 潔 大学院理学研究科教授

核研跡窓外の凜としたアベマキの冬木立を眺めながら、来し方を思い遣った。

伊勢湾台風から間もない東山は、空の青と灌木の緑に赤土が映え、名古屋大学は若かった。そんな時代に、植物の生長部位に現れる生体電位の意味について研究を始めた。H<sup>+</sup>の起電的膜輸送を要とする茎の生理学的構造模型を描き、生長を支える細胞吸水と細胞壁伸展の両者にH<sup>+</sup>ポンプが関与する事を突き止めた。さらに、水の輸送はH<sup>+</sup>輸送を初発とする第3次の能動輸送である、との主張を展開し、これを根の吸水機構にまで広げた。すべて共同研究の賜であった。

情報文化学部の発足に合わせ教養部へ移ったが、改組後も一握りの教員に教養と基礎教育の大半を負わせるという現実、茫然自失の日々であった。そんな中、大学院時代の

研究室廊下の片隅でしばしば耳にした恩師の言葉、「教育はDNAに依らない遺伝である」を思い出し、教養教育の裏付けが無い専門教育は危うく、携わる教員には誇りと安心が必須と考えた。大学院重点化の仕上げである情報文化学部の改組と、全学教育の充実を目指した制度改革に加わり、大学法人化の準備にも少しばかり係わった。そんな時、植物の研究を通して育んだ人間と社会と学問についての自身の考えが試されているのだ、と思うことで自らを鼓舞してきた。

再度移籍して迎えた核研跡地での半年は、研究と教育の楽しさを改めて認識するまたとない時となった。



## 退任に寄せて

菅井 秀郎 大学院工学研究科教授

いつしか私の人生の半分を名古屋大学で過ごさせていただき、恰もこのまま続くかのような錯覚さえ覚えています。30年前になります。プラズマの研究に思いをいただきながら、全国共同利用プラズマ研究所で知られる名古屋大学に赴任してきました。それから、あっという間に時が過ぎた感があります。これまでを振り返り、自由闊達な環境の中で思う存分に研究を楽しませていただきましたことに、深く感謝申し上げます。また、年々歳々新しい学生と出会ってリフレッシュしながら教育に携われたのは、大学ならではの醍醐味でした。とはいえ、若手育成にどの程度寄与できたかと自問すれば、工夫と努力は重ねたものの、結果は様々であり、教育独特の難しさを知りました。

基礎物理から応用技術へと進むなかで、プラズマが次々と

見せてくれる様相に新鮮な驚きと感動を覚えたものです。この分野では世界的にもトップレベルの研究水準と研究者群を誇る本学で過ごせたのは幸せでした。その研究者仲間の永年の夢は、わが国初のプラズマ応用のセンターを名古屋大学につくることでした。工学研究科の強い後押しがあって、その夢が「プラズマナノ工学研究センター」の設立となって昨年10月に実現しました。このセンターがさらに大きく飛躍するよう、できる限りの応援を続けたいと思っています。

最後になりますが、名古屋大学の益々の発展をお祈りし、お世話になりました多くの方々にお礼申し上げます。



## 名古屋大学18年間を振り返って—メタロミクスとごみおじさん

原口 紘丞 大学院工学研究科教授

私は昭和63年12月1日付で名古屋大学に赴任してきました。赴任当時は「工学部応用化学科」専任でありましたが、現在の所属は、「大学院工学研究科化学・生物工学専攻応用化学分野無機材料・計測化学講座分析化学研究グループ」であります。この18年間は教育改革、大学改革と称する改組が行われてきた結果であります。その長さには驚いております。

私は、理・農・工と異分野を遍歴してきました。研究面では、高感度・多元素同時分析法の開発研究を手がけ、「地球システムの全元素化学」、「拡張元素普存説」、「細胞小宇宙説」（生物細胞1個にすべての元素が存在）、「メタロミクス（metallomics）」など、皆様にはまだ耳慣れない研究領域を提唱して、楽しんできました。その中で、メタロミクスが

科学用語に採用され、世界的に注目されるようになりつつあるのは嬉しい限りです。

校内の仕事では、廃棄物処理施設長として、「実験系廃棄物の回収処理システムの整備」とともに、「ごみ全学一元化分別回収処理システム」、「資源古紙分別回収・リサイクルシステム（トイレトーパー製造）」を全学の皆様のご協力を得て、実現することができました。「ごみおじさん」の称号と、廃棄物処理施設に総長感謝状をいただいたのは懐かしい思い出です。

最後になりましたが、名古屋大学並びに構成員の皆様の益々の御発展を祈念して、感謝の言葉とさせていただきます。



## 基礎と応用の狭間

松井 正顕 大学院工学研究科教授

名古屋大学大学院を修了してから、他大学で研究し、1976年に名古屋大学へ戻りました。そして、大学院重点化より少し前に行われた金属系学科から材料系学科への改組後、物性機能学講座で研究しました。その後、大学院重点化で結晶材料工学専攻に移りました。同専攻は物理・化学・材料系の各研究分野の先生方で構成されていて、材料開発のなんたるかを教育する上では最高の専攻といえます。

これまで、私は工学の各分野を横断する分野でもある磁性の応用を主テーマとしてきました。磁性の基礎は量子力学ですが、実業では技術磁化過程が最重要となります。新規磁性材料開発では両者を網羅することで独自性ができます。それには十分な研究設備も必要です。私の多くの研究は基礎と応用の狭間の研究になってしまいました。金属人工格子や温

熱療法のインプラント材開発研究では狭間にならないように努力しましたが十分ではありませんでした。新進の材料研究者・技術者の方々には、是非とも、狭間研究にならないような材料開発を目指されるよう望みます。

名古屋大学にお世話になってから45年になります。他大学や外国生活が約8年ありますが、それにしても、定年までの人生の大半を名古屋大学で過ごさせていただいたこととなります。恩師に恵まれ、優秀なスタッフや学生さんにも出会え、立派な研究環境のもとで研究できたことを心より感謝しております。



## 名古屋大学の発展を願って

高村 秀一 大学院工学研究科教授

大学院修士の学生として金沢から名古屋に来て40年余となる。この間に多くの波風がありながらも充実した研究生活を送ることができたのは、工学研究科の皆様のお陰であると、まずもって感謝申し上げたい。名大工学部電気系には学生時代を含めて長年お世話になり、特に先輩の多彩な面々から多くの薫陶を受け、私のものの考え方に大きな影響を与えた。平成4年頃よりエネルギー理工学専攻の立ち上げに参画し、教室間の考え方の相違に悩みながらも、現在ますます重要性を増している「エネルギー」に真正面から向き合うことができ、視野が大きく広がっていったことは、複合専攻に所属して得ることができた収穫の一つである。また、多様な素養を持つ学生が同じ研究室の中で育っていき、学位を取得し、研究者・技術者として成長するのを目の当たりにできたのは複

合専攻ならではの大きな喜びと自信になった。

研究面においては、プラズマの魅力を十分に味わいながら核融合発電の夢を追い続けることができた。日本に誘致はできなかったものの、国際熱核融合実験炉計画（ITER）に、微力ながら参画し、そのスタートを名大での最後の年に迎えることができたことに大変満足している。

大学は法人化の中でそのあり方の模索が続いているが、多くの優秀な構成員を大きく巻き込んだ高邁な議論の中で、人類の未来にとって大学の果たす役割をしっかりと見据えつつ、名古屋大学が見識を示されんことを切に期待する。



## 若人らとともに未来を見つめて40年

野村 宏之 大学院工学研究科教授

本学工学部鉄鋼工学科の第1回生として1962年に入学し、それ以来通算45年間大学に籍を置いてきました。研究では凝固・鋳造プロセスにおいて流動や伝熱現象に関わる課題を追及してきました。これは、大学院の指導教授の“移動現象の分野をものにしておけば、将来飯の種に困らないよ”との言葉が研究動機として強く心に残ったためだと思います。1978年より豊橋技術科学大学に移り、研究成果の実用化を力点に置いた仕事をしました。そこでは民間との共同研究で双方が共に満足のいく成果を得ることの難しさを肌身で知りました。また企業出身の教授と、新鮮な切り口での突っ込んだゼミや討論をしたことが私にとって大きな財産となりました。1993年に名大に戻ってからは、これまでの集大成となる研究をしたいと思っておりましたが、一方では大学院重点化

や大学法人化などの課題の検討が逼迫していました。学科(専攻)主任を4回務め、これらの対処に奔走しましたが、研究や学生との時間をとるのが必ずしも十分にはいかず、その点が今でも残念な思いとなっています。

“ものづくり”に関する研究をする傍らで学生のインターンシップ参加の推進や、経済産業省の中核人材育成事業にも関わってきました。今後も若い人の育成に尽力することにより、大学、研究科、研究室の方々への恩返しをしていくつもりです。これまで長年皆様にはお世話になり、誠に有難うございました。



## 魅せられて 磁場と戯れ 夢なかば

浅井 滋生 大学院工学研究科教授

昭和37年に工学部に入学以来、学生および職員として計45年にわたり名大にお世話になりました。この間、平成5年には私の研究室に留学中の学生の妻子が毒キノコを食し、亡くなるという「毒キノコ事件」が起こりました。大変辛い出来事でしたが、全国の多くの皆様から温かい支援をいただいたこと、それに引き続いての民事裁判では学生の立場を守れたことは、忘れられません。今、その学生は中国大連理工大学の教授として活躍しています。後半では、工学部の皆様に担がれて21世紀COEのプロジェクトリーダーを務めさせていただきました。お陰で工学研究科の化学系の学生と先生方は無論のこと、全学の関係者との知己を得、大きな財産が出来ました。さらに、評議員や難処理人工物センター長として大学行政にも少し係わる機会を与えていただきまし

たお陰で、事務方の知人も増えました。このような多くの出会いから尊敬出来る人間とは職層に依らないことも学びました。

さて、この永き年月、身心を健康に保つことが出来たのは、趣味のテニスと川柳のお陰です。というわけで、最後に私の大学川柳をご笑読ください。「法人化 蓋を開けたら 呆人化」、「科研費を 大きく当てたら 小さく育ち」、「コートでは 仕事で見せぬ エース打ち」、「委員会 こんなにあって いいんかい」、「歳かなあ 妻という字を 毒と読み」、退職に当たっての心境は題目のとおりです。明るく、楽しく、そして力強い名大を期待しています。



## 大学法人としての名古屋大学

北野 利明 大学院工学研究科教授

2003年10月に、民間会社ポリプラスチックスを定年退職して、名古屋大学へ移って既に3年半が経過し、この3月末に名古屋大学で第2の定年を迎えることになりました。この短い期間に名古屋大学が国立大学法人に変わるという変革の時期に立会い、名古屋大学には従来と異なる制度・規範に基づく行動が要請され、民間会社での私の経験も少しは役立つ機会もあったのではないかと考えています。

名古屋大学は、大学法人となった以上、民間会社の事業活動の規範となっている、いわゆる「3C」(「法令遵守(Compliance)」、「社会的責任(Corporate Social Responsibility)」、「顧客満足度(Customer Satisfaction)」)を認識し、アクションすることが求められる時代になったと考えています。「法令遵守」は、大学に関わる全ての法令の

遵守で、社会の構成員のミニマムの義務であり、「社会的責任」は、法令を超えた、さらに高いレベルでの社会的責任を自らに課し、その達成を目指すことです。特に、「顧客満足度」については、名古屋大学のアウトプットである、教育成果の「学生」と、研究成果である「科学技術」の質と量が、大学のお客様と考えられる「現在および将来の社会」の期待に十分応えているかを、常に考えていただくことを願っています。



## 真理は現場と歴史に聞け

武田 邦彦 大学院工学研究科教授

人間の五感や頭脳は欠陥が多く、「真理」どころか「目の前の事実」そのものも正しく捉えることは出来ない。私は長く実験系の自然科学を経験し、人間が事実を知るのは「事後」であって、かつ良く整理された状態でなければ判然としないと思えるに至った。それには現場と同じく過去のものである歴史について言いうるのではないか。元禄に爛熟し、天保に改革が行われた江戸の歴史は、実に不思議だが、そのまま現代と近未来に投影することが出来よう。

今まで「よもや」と思うことが次々と事実になり、それらが積み重なってそれまでとまったく異なる概念が見えてくる。それこそが学問の進歩というものだと言われるが、大学にとって現場と歴史という二つの過去こそが命なのだろう。

ところで、大学は学問と教育の2つの機能を持っている。

毎年、大学に入ってくる新しい学生の命が大学に未来を吹き込み、ともすれば衰退しがちの精神と肉体をリフレッシュしてくれる。学生が交代しない研究機関は衰退を防ぐのが難しい。でも、学生は大学にリフレッシュするために入ってくるのではなく、人格の完成を目指して学業に励む。教育基本法第一条が我々、教育者の目的である。でも、職業教育のシステムは十分に発達している現在の大学で人格教育の議論が不足しているようにも感じられる。名古屋大学を終わって私に体力と気力があればそれを考えてみたいと思う。



## 定年に際して

三矢 保永 大学院工学研究科教授

縁あって名古屋大学に奉職して、ここに無事に定年を迎えることができました。この間、多くを学び、多くの知己を得て、豊かな経験を積み上げられたことに感謝します。

私の研究活動期間は、電電公社(現NTT)の19年間で、大学の19年間になり、二つの社会を等しく生きて、人生が2倍になって得をしたように思えます。この期間は、まさに情報化社会の揺籃期・発展期とオーバーラップします。脆弱な日本のコンピュータ産業を育成するため、通産省・NTT・産業界が悪戦苦闘して、国家戦略を遂行していたときに、たまたまNTTに入社して、ファイル記憶装置の研究開発を職とすることとなりました。大学に奉職以降にも、産学連携組織のメンバーとして、磁気ディスク装置に関わる研究に従事することになり、38年間の長期にわたって、記憶装置の発

展を目の当たりにしてきました。大型装置開発の頃(25年前)は、ファイルメモリ1万円/1Mbyte、プログラム1万円/1行という時代でした。現代に適用すれば、携帯ハードディスクは10億円、携帯電話は700億円にも相当します。技術革新の一翼を担ったという自負の念とともに、それ相当に豊かになったのか、との疑問がわいてきます。便利さ追求のあまり、失ったものが多すぎるとの思いは、歳のせいでしょうか。何時の時代にも存在した問題なのかもしれませんが、人生の最終楽章において「なにかしなくては」と思い始めています。



## 材料構造信頼性の基盤を求めて

田中 啓介 大学院工学研究科教授

京大から赴任して、もう16年目も経ったのかという感慨です。1991年に赴任してきたときには名古屋は全く未知で、やっていけるのか大変不安だったのを思い出します。製造業が盛んなこの地区の機械材料強度学の拠点となることを目指して研究室づくりを始めました。当時、研究室には設備がほとんどなく、まず実験装置を整備することから始めました。研究室づくりの3要素として、「アイディア」「人材」「資金」を重視しました。

京大の頃から、材料強度のなかでも材料の疲労や破壊の問題に取り組んできました。そもそもこの研究を始めた理由は、金属疲労が学部の講義で最も分かり難くかつ学問的でなかったことがきっかけで、これに科学的な筋道をつけたいというのが動機でした。博士課程のときには、細束X線による疲

勞の研究を行いました。また京大の助手・助教授時代は、破壊力学およびマイクロメカニクスを中心とした力学解析に主力を注ぎました。名大では、この疲労の力学を設計に応用できるまでに体系化して科学的な筋道をつけること、X線法を主体とした非破壊応力計測法を新材料構造に展開すること、さらに関連する新分野の開発などに主力を注ぎました。2003年に主催した実験力学の国際会議では、400名以上の参加者を得て大成功であり、最も印象に残っています。この16年間、自由に研究活動をやらせて頂いて、おかげさまで初期の目的をかなり達成できたのではないかと考えています。心から感謝いたします。



## 元気な農山村の復活を望む

平嶋 義彦 大学院生命農学研究科教授

名大に移ってきてから、それまでなかなか手の付けられなかったすまいについて考えることにして、伝統的木造のすまいの分析や開放的住宅構法の開発といったことに加えて、世界の人々のすまいを眺める旅をしてきました。すまいを巡るこの旅から気のついたことは次のようなことです。それは多くの国において人々の暮らしは歴史、伝統、風土と密接にかかわっていること、それ故いわば地に足をつけた落ち着いた生活を送っているということです。その大きな理由は、国民が農業、林業、漁業といった第1次産業を大事にしていることではないかと思えます。例えばヨーロッパの都市をみますと、それらは長い年月をかけて造られてきたものですが、その落ち着きと美しさに惹かれます。都市は農村が反映したものであるということを考えると、農業を大事にしているヨー

ロッパ諸国の都市がなぜ人々を惹きつけるのか納得がいきま。疲弊した農村、荒廃した都市、このような日本の実情はこの対極にあるような気がします。食糧生産は国の根幹に関わることであり、また農業や林業は環境保全に密接に関連しています。そこから産出されるものを原材料とする産業は1次と2次の中間の1.5次産業として位置づけ、国民がそれを大事に育てていくことが必要なのではないのでしょうか。まっとうな社会を造っていくために元気な農山村の復活が望まれる由縁です。



## 創設期に生きた33年間

杉村 公也 医学部保健学科教授

1974年7月に4年余りの研修医生活を終え、母校の第一内科学講座に戻って、33年の歳月が経過致しました。母校に戻った時も、教職に就くとか、研究生活に没頭するとか、大それた考えや野心があったわけではなく、先輩や同級生と同じように、大学病院でしか経験できない症例を経験し、医師としての知識と経験を深め、医学博士を取ることでした。そんな私が33年間も大学に留まったのは神経内科学講座と保健学科の創設に関わって、「できるだけ完成された形に」との努力するうち月日の経つもの忘れてしまったからでしょう。33年間の印象と感慨としてやはりこれが第一です。

大学という実績が重んじられるところで、新興の新設講座や学科が場所や定員の要求も不可能なことが多く、忍耐が必要でした。そうした中で高橋教授の人格に惚れ込み、研究

生活でも医局生活でも教授と心をともし努力した時期でした。

教授の退官の2ヶ月後、医療技術短期大学部に移ることにになりました。驚いたことにそこにはおよそ研究設備と言えるものではなく、教育負担だけが重くのしかかりました。保健学科を作ることは研究できる環境を作ることになると信じて懸命に努力し、やっとその骨組みができたところで定年となったという所が実感です。努力の割に報われなかったと思うのか、野心の無かった割には多くのことを作り残したと考えるのか、自分でもよく分からない気がします。



## 現役生活を顧みて

森 尚義 大学院医学系研究科教授

私は昭和43年名古屋大学医学部を卒業し、翌44年4月名古屋大学大学院生として、第一病理学教室に入局し、2年後福島医科大学に転入学いたしました。そこでリンパ腫研究を始め、これがその後ずっと続ける研究テーマとなりました。福島には8年いましたが、その後筑波大学に転出いたしました。筑波大学で13年過ごした後、21年ぶりに名古屋に帰って参りました。おかげで名古屋大学を以前とは異なった視点から見る事が出来、少しは視野が広がったのではないかと考えております。

私が名古屋に戻って来てからというもの、絶えず関連病院から病理医を欲しいと言う要請があり、これに応えるのに終始した現役生活でした。お陰様で私の在任中に14~15名の大学院生を受け入れる事が出来、関連病院にもそれなりの

人材を送ることが出来たのではないかと思います。出来れば500床以上の病院に常勤病理医が少なくとも2名、出来れば3名以上いることが望ましいと考えています。

病理もご多分に漏れず、後継者不足に悩まされております。聞くところによれば専門病理医の平均年齢は52歳であるとか、これでは数年後には病理診断は立ち行かなくなってしまうのは目に見えております。学生並びに卒業生の皆さんにはもっともっと病理に関心を持っていただき、一人でも多くの方が病理医を志してくれればと思う次第です。



## 紆余曲折の大学生生活

下方 薫 大学院医学系研究科教授

永かった大学での生活を省みると、一直線に目標に向かったとはとても言い難いものがあります。今に比べると遙かにのんびりとした学生時代も卒業間際になってにわかには騒然となり、医局解体、インターン制度ボイコット、臨床系大学院ボイコット、医師国家試験ボイコットなど激動の時代に突入しました。臨床研修病院も自分たちで病院と交渉して探すなど、当時としては前代未聞のことでした。総じて現在の学生諸君と比べて自主性が遙かに高かったように思います。

講義がとても印象深かった教員の下で臨床と研究の勉強をしたいと考えて、大学の内科学教室に戻ってみると、大学紛争で嫌気がさしたのか、すでにやめられていて、とても失望しました。鬱々として内科学教室に所属していましたが、親しかった先輩の薦めもあり、基礎教室でしばらくお世話にな

ることとしました。数年たって指導教授が病のために亡くなられて困惑していたところ、内科学教室から戻ってこないかとの誘いを受け、再び臨床の道を歩んできました。その後、新設された部門に移動しましたが、大学院重点化に伴う再編で再び内科学教室に戻って現在に至りました。若いときから一貫して教育や研究に取り組んでこられた方たちと比べて、何と回り道の多かったことかと痛感します。

暖かい指導者、気のあった同僚、優秀な後輩に恵まれて大学生を送ることができたことはとても幸せでした。ただただ感謝の念でいっぱいです。



## 名古屋大学ありがとう

二村 雄次 大学院医学系研究科教授

私は昭和49年秋以来約32年半の間、名古屋大学に勤務させて頂きました。新しい中央診療棟は昨年からの稼働しておりますが、手術室へ入る度に平成13年当時の松尾総長及び文部省との概算要求の折衝の場面を思い出します。定例の14年度予算案の中に中診療棟改築の通達がなく、13年12月末ギリギリに補正予算案の中に入ったという連絡が入り、心の底から安堵しました。病院長としてのもう一つの大事事は名古屋大学の中の唯一の現業部門である附属病院が法人化後にどうなるのか職員一同に周知し、意識改革を図ることでした。2年間の病院長時代の経験は、その後の医療情勢の激変に対応するのに大いに役立っています。

本業の外科学の方では肝・胆道・膵癌に対する新しい診断・治療法や手術法を開発したり、改良したりする機会に恵まれ

ました。大がかりな手術で、手術前・手術後の患者管理にも大量のマンパワーが必要であり、夜も昼も土・日もない生活が続きましたので、医局員の皆さんには多大な犠牲を強いる結果となってしまいました。ただ名古屋の地に世界に冠たる「胆道癌治療の拠点」を作り上げることができた自負があります。

課外活動も私の名古屋大学での生活の柱の1本となりました。昭和38年入学以来、医学部では医師になるための職業訓練を受けましたが、22年間の柔道部長を含めた44年の長きにわたり、名大の柔道場は私の精神と肉体を創造・改築する場となりました。

長い間、本当に有難うございました。



## 循環器病予防の26年間

豊嶋 英明 大学院医学系研究科教授

1968年に本学医学部を卒業し、臨床を修行している間に、研究へと興味移って環境医学研究所に入局し、米国留学も含めて約7年間心臓の電気生理学という基礎医学研究に携わりました。その後、再び臨床経験を循環器病の専門機関で積みました。臨床医学は大きく治療と予防の分野に分けられますが、当時は成人病と呼ばれた様に、心筋梗塞や脳卒中は遺伝体質に、加齢が重なって生じる現象と認識され、臨床の第一線では動脈硬化の帰結である臓器の病気を如何に治すかという点に心が奪われており、私もその一人でした。

高血圧、高脂血症や糖尿病の患者さんに対しても治療していると認識しており、本当はこれら病気の治療は、後に来る標的臓器疾患の発病予防が目的なのだとは気づきませんでした。しかし、卒業後14年目に偶然、予防医学に目を向ける

機会を与えて頂き、その勉強をしているうちに大切さを認識し、現在まで26年間予防をテーマとする社会医学に携わってきました。

本学に迎えられた後は、同意を頂いた愛知県職員の方々のご協力を戴き、検診成績や生活習慣と循環器系疾患発病の関連性やその機序を明らかにしようと10年間観察させて戴きました。教室の若い方々と力を合わせて次々と知見を発表でき、大変嬉しく思っています。

結局、私は医学部を卒業後も、基礎、臨床、社会医学を更に一巡学ばせて戴いたわけです。お世話になった先輩をはじめ多くの方々に心から感謝いたします。



## 医療情報学・病院管理学の25年

山内 一信 大学院医学系研究科教授

昭和38年、名古屋大学入学以来44年間のほとんどを医学部、病院カルテ部・医療情報部、大学院医学系研究科で過ごしました。この間に大学改革、医局制解体、大学法人化など様々な変革が起こり、競争原理と自己変革へ意識改革が求められました。

自分の携わってきた情報管理を振り返ってみますと、行ってきたことは情報IT化、つまり診療情報をいかに効率よく保存・活用できるようにするかということにありました。幸い皆様のお陰で電子カルテという形、基盤には到達できたように思います。医療にはさらに効率性の高い、安心・安全のシステムが求められ、実現されつつあります。

一方、科学はルネサンスを契機として著しい進歩をとげました。多くの疾病の克服、寿命の延長などに顕著に現れてい

ます。IT化はこの科学の成果を情報システムにのせ、よりよい医療の実現を目指しています。

しかし施政のみならず社会生活でより確実に安心感を求める科学万能主義は、人間を科学技術やマニュアル生活に安住させ、ときには規則に極端にこだわり、自分の殻に閉じこもった人間をたくさん作ってしまいました。競争原理と自己変革の意識改革は型にはまったプロセスに人間を埋没させ、本来人間に備わった、生きて行くための意思や生きる力を削いでしまっているように思います。これからはシステム構築という業務プロセスから一歩下がって、少しでも本来の人間というものを見つめる努力をしてみたいと思っています。



## 「定年を迎えて」

井口 昭久 大学院医学系研究科教授

長い間名古屋大学においていただきました。若いころは大学で定年を迎えるなどとは思っていませんでしたが、大学で定年になります。

私達医学部の同期の友だちの多くは開業しております。この人々には定年はありません。勤務医として病院に残った者や、私のように大学病院に取り残された者には定年があります。開業している友人を羨ましいと思うこともありますが、彼等に言わせると、自分で定年を決めなくてはならないのも結構辛いものであると言います。確かにするするといつまでも同じ職業に留まることは世の中のためにはなりそうもありません。それに本人にとっても好ましいことではなさそうに思えます。だから強制的に定年を迎えさせる制度は悪い制度ではないかもしれません。

しかし長年いた大学を去ることは寂しいものです。かといって今の仕事を続けたいとも思いません。叶うことなら、病院長を辞めて、そして教授も辞めてフリーの立場で大学へ通いたいと思うのですが、そうすると若い者から煙たがられることは明らかであります。さすればどうすればよいか。長年老年医学をやって講演などを通して、老後の過ごし方などを一般大衆に説いてきたのでありますが、言ってきたことが自分には当てはまらないことが分かりました。自分に当てはまらないのなら他人にも当てはまっていなかったのではないかと今頃になって思っています。

長い間ありがとうございました。



## freedom & independence

菊池 韻彦 大学院医学系研究科教授

私は東大理学部の修士課程を出たあと、フランス政府の給費留学生としてマルセイユで3年、その後ハーバードで3年、NIHで4年とアメリカで生活してから帰国し、当時としては非常に珍しかった大企業の基礎研究所、三菱化成生命科学研究所で15年ほど研究をしたところで突然、本学の医学部附属病態制御研究施設、医真菌研究部門に奉職することになりました。

転々と職を変えたため、研究テーマも傍目には一貫していないと思われがちですが、とにかく分子生物学のいわゆるセントラルドグマの周辺、近年は染色体の構造がどう作られるか、それがどのように娘細胞に分配されるかという問題に取り組んで参りました。かつてアメリカを離れたのは、なんとなく、自由な、Independentな研究がしづらくなってきた

からです。

次の三菱化成の生命研も、25年ほど前は「いい研究をして下さい」ということで納得していたのですが、だんだん大型プロジェクトだとかスポンサーにわかってもらえる研究だとか締めつけがきびしくなり、名古屋大学にきた時はさすが大学、自由の空気を存分に味わったものです。その後、大学院重点化、大学法人化と改革が進み、ここでも研究のスポンサーがつかないと二進も三進もいなくなる今日この頃、国立大学はどうなっていくのだろうかと心配しております。



## Pharmaceutical Care の確立を目指して

鍋島 俊隆 医学部附属病院教授

薬剤部に教授として赴任してから17年余お世話になりました。小生の研究分野は脳科学ですが、医学研究科には多くの優秀な同じ領域の研究者がおられ、大変刺激になりました。お陰様で薬物依存についての研究では厚労省および文科省の研究班班長として多くの研究者と楽しい研究生を送ることができました。その成果として薬物依存に関わる新しい分子の発見と治療薬の候補物質の特許化ができました。

薬剤部の業務としては薬物療法を介して患者さんのQOLを向上すること(Pharmaceutical Care)を目指してやって参りました。厚労省の相談を受け、若手薬剤師を6ヶ月間、アメリカの臨床現場で研修させるための事業を興し、98年より9年間に41名留学させました。又海外より50名以上の臨床薬剤師を招聘し日本全国の病院へ派遣し、ベッドサイ

ド業務の指導を受けさせました。その結果、臨床薬剤師の職能向上、リスクマネジメント、医療経済、臨床薬剤師の教育方法など多くのことを日本の現場へ導入することができました。名大病院でも、6年制薬学教育に向けて総長以下指導部のご理解を得て、名城大学と医薬連携協定を締結し、医学系研究科常駐教員を薬学部から派遣して頂くことができました。また、医・薬学部生の教育の場であり、薬について患者さんにしっかりと理解して頂くための「薬剤師外来」もお認め頂きました。これらの種が芽吹きしっかりと育つことを祈念しています。



## 定年雑感

安田 信之 大学院国際開発研究科教授

アジア経済研究所から名古屋大学大学院国際開発研究科に転職して15年。この間の大学の変貌振りは実に凄まじい。次々と潇洒な建物が建てられ、キャンパスの外観は様変わりしつつある。当初間借りした法学部の研究室にはルームエアコンを取り付けたが、かなりの教室・研究室にはそれすらもなかった。今ではほとんどが全館冷暖房となっている。

研究のあり方も激変している。当時まだ一般的ではなかったメールやインターネットなどの電子機器がいまや不可欠な存在となっている。ペン書きからキイ叩きへの論文書きの変化の思考方法への影響も気になるところだが、今戸惑っているのはインターネットである。デジタル化された膨大な情報がこれにより全世界に無限に拡散され、そのほんの一部を読むだけでも一生かかりそうである。それらを読みとり、解析

し、新しい知見を加えるとなると、もうこれは人間業ではない。進行中の「大学改革」も、このような時代の要求に応えることを目指しているのだろうが、そこに「社会のニーズ」に安易に順応するという危うさも感じなくもない。

いずれにしても、大学も大きな変動に巻き込まれつつあり、このなかを生き抜くには超人的な能力が要求されそうである。そう考えるとこの時期に仕事の区切りをつけるのは良いことかもしれないと思ったりする。名古屋大学の更なる発展と皆様方のご多幸をお祈りしたい。



## GSIDの16年

江崎 光男 大学院国際開発研究科教授

GSIDは1991年の設立で、私は、創設時のメンバーです。創設から今年で16年目にあたりますが、私の開発計画演習からこれまでに、30人の修士、20人の博士が巣立って行きました。私の最初の演習生（GSIDの最初の修了生）である甘奎文さんは、現在、中国広東省深圳市に本社を置き、年商十数億円、従業員数百人の製造会社のオーナー経営者です。その他、清華大学教授（全国政治協商会議議員）、コロンボ大学教授、カラチ大学助教授、インドネシア開発計画庁局長、ベトナム貿易省研究センター長（部下1人）、立命館アジア太平洋大学教授、名古屋市立大学助教授、ダマスカス大学講師（今春修了）等々、その多くが、日本で、外国で、母国で大いに活躍されていることは、GSIDや名古屋大学にとって大変に心強いことであり、教師としての私にとっても大変に

嬉しいことです。

21世紀に入り、我々をとりまく時代は大きく変わりつつあります。日本のODAは、今後5年間で戦略的に100億ドル増額との政府決定がなされたものの、現在、米国ははるか遠く、英独仏とは逆転寸前の水準まで低下しました。東アジアの貧困は急激に低下し、南アジアもインドを筆頭にその曙光を見つつあります。GSIDが、創設時と同様、新たな「天の時、地の利、人の和」を得て、ますます発展を遂げますよう、心から願っています。



## 早春

佐藤 肇 大学院多元数理科学研究科教授

暦の上では春だということで、冷たい風の吹く一日の、既にいちめんが暗くなっていた終業時間にも、まだ西の曇った空には、沈みかねている太陽がかすかに残っていて、日が少しずつではあるが長くなっているようである。

先日、廊下から学生たちのやや高ぶった談笑の音が聞こえてきた。来年度の卒業研究の指導教官の決定のための会合があるのだろう。専門的な学問の研究への出発となるこの頃は、大きな期待に満ち溢れ、またそれよりは不安がさらに勝っているかもしれない。

私のこの時期は、はるか昔のような、いやほんのちょっと前のことのような気もする。そうではない。廊下にいる学生たちの中に、確かに私は交ざっている。ほら、同じ道を進んで来て若くして亡くなった友達の、希望に溢れた声が今聞こ

えているだろう。早くから連絡の取れなくなった彼も、テキストを確定して読みはじめそうではないか…。

共通一次の教室を確認する緊張した受験生にも出会う。迷いながら受験する学校までたどりついたのも、遠い昔のような、あるいは時間は浮浪していて、逆に未来のことかもしれない。私の現在は、さらに若い時期へとタイムスリップしてしまい、それにもかかわらず、年は変わらずに進んで行く。



## 私を鍛えてくれた名古屋大学

土屋 昭博 大学院多元数理科学研究科教授

私が名古屋大学理学部数学教室に赴任したのは1969年10月でした。当時の数学教室は、創設から始まって1950年代を担った教授の方々が去った後、名古屋大学出身の久保田・森川両教授を始め、40代前半の若い教授の方々が華々しく活躍し、活気に満ちていました。

私の研究はトポロジーと呼ばれる分野から始まりました。球面をファイバーとするファイバー束の特性類を決定した私の最初の仕事は、私の最も気に入っている仕事の一つです。しかし、トポロジーという分野は数学の中では新参者であり、切れ味はいいがすぐに刃こぼれする刀のようなもので、よい研究対象を掘り起こし、刀を研ぎ直してから新たな戦いに挑む必要がありました。1970年代中頃から、新しい研究対象を求めて苦しい数学放浪の旅が始まりました。暗中模索で約

10年が経ち、数理物理学で新しい仕事ができるのは1980年代中頃でした。このときに行った共形場理論の研究は、私の最も気に入っている仕事です。論文も書かずに過ごした苦しい10年間に、何も言わずに私を遠くから見守るよう支えてくれた当時の教授の方々の、名古屋大学数学教室のおおらかな雰囲気は、私を次の仕事にかき立て、鍛えてくれました。このことには今も感謝の気持ちを持ち続けています。

この数年来、自分流の新たな考えが形を取りつつあり、この時期に定年を迎えて、これからは雑事に惑わされずに数学三昧に浸れるかと、心が弾んでいます。



## 様々なる変貌

中嶋 忠宏 大学院国際言語文化研究科教授

時の経つのは速いものという感慨は、ひとつのアエラの暮れ方にいたってようやく抱きうるもののようなのである。かつて院生であった頃、都内で開かれた森有正氏の講演を聴く機会に恵まれた。氏が語った話柄の中でひときわ印象深かったのは「変貌」の概念——セーヌ川の橋の上からはるか彼方に望む名物のパトー・ムーシュに動きがなく、まるで停まっている風情。それでも確実にこちらに向かっている。そして近づいて来ては橋下をあっという間に通り過ぎてしまう、という卓抜な比喩のほうを氏の哲学的な講釈よりもいっそう鮮やかに覚えている。氏は、個人的な経年変化の認識のみならず、歴史認識の困難さをも示唆していたに違いない。ともあれ、定年という名の変貌などよほど先の話で身近には感じられなかった駆け出しの頃が懐かしい。

退職は生活様式の様々な変貌を迫る。不要な書籍は整理し、PCを仕事向きのウィンドウズから趣味専用のマックに替える……等々。A4版の書類との格闘は現役時代の一大責務であるが、半分のA5に統一しようと考えているのもその一環。序でに鞆も小振りなものに、という縮み志向である。逆に、変貌に抗してこれまでどおり早起きをし、定刻に朝食を摂り、研究三昧の一日を始めたいとも念ずる。まるで引かれ者の小唄の心境。茫漠とした自由へと引かれる今この時、〈変貌〉に鈍感なまま私の時間を過ごした寛容なメイダイ・アカデミアに感謝したい。



## ハッピー・ジェネレーション？

安藤 重治 大学院国際言語文化研究科教授

世間では団塊の世代の大量定年退職が話題になっている。また同時に、現在25歳～35歳の人たちは、就職時期がバブル崩壊後の日本経済の低迷期と重なって正規雇用の機会に恵まれていない人が多く、ロスト・ジェネレーションと言われる。

昭和18年生まれの私は、団塊の世代ではないが、実は団塊世代のお陰をこうむった一人である。というのも、私が就職した頃は団塊世代の大学入学時期であったため、大学の学生定員、教員定員がともに増加しつつあったからである。大学教員を目指す今の若い人たちを待ち受けている厳しさがよく分かっているから、なおさら自身の幸運を感じずには居られない。さらに言えば、私が小学校から大学を通じて習った先生方は、大戦を身をもって経験した人ばかりであった。私

には戦争の直接経験はない。しかし、戦争の痕跡や記憶が濃厚に立ち込めている環境の中で育ったことによって、現在の私の考え方や行動の幾分かは確かに規制されていると感じる。戦争を直接経験することなしに戦争の怖さや悲惨さを記憶にとどめているということは、二重の幸運であるといえないであろうか。生まれた世代による運不運は厳として存在するから、それをどうこう言っても仕方のないことかもしれない。今はただ、非力な私が最高の職場で最高の同僚に恵まれて30年余りの教師生活を送れたことを感謝するばかりである。



## 人生夢の如し

神谷 修 大学院国際言語文化研究科教授

私は中国からの帰国者です。1966年大学を卒業した時ちょうど文化大革命が起きました。中国各地で紅衛兵が街にとび出し、破壊と無知と狂言の限りをつくしました。民家に押し入って家じゅうをひっくり返し、骨董品を打ちこわし、書画を引き裂きました。火を燃やして、得難い書物を投げこみました。瞬く間に、各家庭で大切に所蔵されていた文化財の殆んどが破壊され消失しました。当時大卒の学歴を持つ人は一律に「反動的ブルジョワ知識分子」として批判されました。私も「思想改造」の名目で農村に下放され農作業に従事させられることになりました。

1978年10月3日初めて日本の土を踏み、まったく異なる社会での生活が始まりました。中国語を教えながら日本語を勉強し、一日6コマ教えたこともありました。六年の歳月

を経て名古屋大学の専任講師になり、教えることのほかに慣れない仕事ばかりでしたが、いつも学科や研究科の教職員の方々に助けられ乗り越えられたのは、まるで神様の按配のようでした。研究室を絶えず充実させることに伴って、自分の世界が形成され、春休みや夏休みも私の研究生生活は殆んどそこで送りました。

私は、これまでの六十三年間を思えば、幸せを味わい、苦難も味わいました。人の温情や忠節を知り、また人間の不屈の力も見ました。本当に長い間有難うございました。



## お別れに 一教えつつ学んだ38年

有川 貴太郎 大学院国際言語文化研究科教授

最終講義が終わって、学生さんたちからケーキをいただいた。チョコレートで文字を書いたプレートが添えられている。homines dum docent, discunt. これはなかなか私の人生を言い当てて妙、と感銘を受けた。「人は教えることで学ぶ」、セネカの倫理書簡集の第七に見える言葉である。語学教師としての私にとってぴったりの「贈る言葉」かもしれない。言葉の知識を仲介するという仕事に天職のごときものを感じてきた私は、語学を教えること、それ以上にそれを学ぶことが好きだったと思う。ドイツ語を担当するかたわらいくつかの外国語も学び、よく同僚（外国人教師のかたがたも）の授業にも学生として出席させていただいた。そして学ぶ側のいろいろな気持ちを味わうことで、自分の教える態度や方法を反省することを学んだ。しかし教師生活の前半ではまだ

かなり一方的な教師だっただろうと反省し、当時の学生諸君にはお詫びを言いたい気持ちである。

教師生活38年間のうち名古屋大学では昭和四十八年から34年間を過ごしてきた。延べにすると一万八千名の大生諸君に授業で接したことになるだろう。教えつつ学ぶという機会をそれほど多くの皆さんに与えていただいたことになる。今後は私、肩書きのない自由な人間としてさらに学ぶことを続けていきたいと思っている。

これまで私と接して下さった学生、同僚、事務職員の皆様に深くお礼申し上げます。



## 夢と未練

近藤 健二 大学院国際言語文化研究科教授

1年前には、こんなことを夢見ていました。水ぬるむ季節、最終講義を終えた私は旅に出る。葉の花畑の脇を通り、林を抜け、峠を越えると浜辺に出る。汗に混じって、娑婆の汚れが滴り落ちる。そして旅籠には、巡礼達との団欒が待っている。これはまるで、『カンタベリー物語』の世界です。

話すのが恥ずかしいくらいにささやかな夢であったのに、実現しそうにありません。なぜかと言って、今も書類に埋もれて、解けそうにもない難問と向かい合っているからです。後は野となれ山となれ、というわけにはいかない。立ち去る者は後始末をきちんとしておかなば。とにかく今は、研究科長室という荒野の只中にいます。

もうちょっとの辛抱？それが違うのです。捨てる神あれば拾う神あると言うのか、縁は味なものと言ったらいいのか、

再就職することになりました。もちろん、すまじきものは宮仕え、という気持ちはいっぱいです。しかし、暇ほど毒なものはないとも言いますように、私のようなつまらない者は、暇な時間ができると、ろくでもないことをしてしまいますから、忙しくしているのが一番です。

本音を言うと、未練があるのです。日はすっかり暮れてしまっ、目的地にまで道のりがあって……。だから、もう少し粘ってみたいのです。夢は逆夢だったのではなく、先送りしただけだと思って、そう言い聞かせて。



## 学んで考える

松本 英二 大学院環境学研究所教授

1987年4月に工業技術院より名古屋大学水圏科学研究所の教授として着任して6年、改組した大気水圏科学研究所に8年、そして2001年から名古屋大学再編で新設された環境学研究所に6年と、計20年間名古屋大学に勤務させていただきました。工業技術院時代は、日本周辺海域の環境問題に関する調査・研究に携わりましたが、その頃顕在化しつつあった地球環境問題に挑戦するため、名古屋大学に転任してきました。

新任教授に対する特別の配慮もあって、研究環境を整えることができました。この間、地球環境問題に関する研究計画が国際学術連合（ICSU）で検討され、1990年から地球圏—生物圏研究計画（IGBP）として実施されることになり、これに対応して日本学術会議でも日本のIGBPの検討が開

始されました。大島康行教授、吉野正敏教授らと共に、日本のIGBPの研究計画の作成に関与しました。特に、古全球変遷（Past Global Changes, PAGES）の責任者として、欧米、アジア、東京などでの会議に多くの時間を割きました。国際的に活躍している研究者との会合や研究室訪問はたいへん有意義でありましたが、一方で自身の研究や学生の研究指導の停滞を招いてしまいました。そこで、1997年の文部省IGBP—1期の終了に際して、IGBPの推進役から身を引くことにしました。

研究室に戻り学生と共にある学究生活に、改めて大学人としての充実した日々を感じました。この間、論語の為政十五にある“学考”を座右の銘として学生と接してきました。

学而不思則罔 学んで思わなければ則罔し  
思而不学則殆 思っずばざれば則殆うし  
その意味は「学んでも考えなければ（ものごとは）はっきりしない。考えても学ばなければ（独断におちいって）危険である」である。今後は、グローバルから地域に視点を移し、環境問題を学考していきたいと思っています。



## 多謝 名古屋大学

小澤 智生 大学院環境学研究科教授

1967年に地質学関連連合学会が名古屋大学で開催され、初めて訪れた本学で初めての学会発表を行った時の緊張感を今でも鮮明に記憶しております。その名古屋大学に1987年に理学部地球科学科の助教授として赴任してきました。当時地球科学教室では助教授以上の人事の際は、当該講座から研究教育の将来計画を研究委員会に提出し、教室会議での承認を受けた後、人選を行い最終候補者に対して学生も含めた構成員全員による可否投票を経て人事を決定しておりました。

赴任後、新しい分野の開拓を要請された私は、地球科学的情報と急速に発展を遂げてきた分子統計学的手法を統合して、これまで科学的研究の対象になりにくかった生物の系統進化の研究に取り組むことにしました。また、絶滅生物からの遺伝子情報の取得にもチャレンジしてみたいと考えまし

た。多くの関係者の御理解と御支援をいただき、当初の目標をほぼ達成することが出来ました。研究の分析試料の収集のためアジアを中心とした世界の各地を訪れ、学生・院生とともに膨大な試料分析と解析をしているうちに、あっという間に名古屋大学での約20年が過ぎ定年を迎えることになりました。39年間に及ぶ私の大学教員生活の中で最も充実した後半部を名古屋大学で過ごすことができたことを大変幸運に思っております。この間、多くの御支援をいただいた名古屋大学の関係者をはじめとする大勢の方々に厚くお礼申し上げます。



## 思い出の詰まった11年

川崎 誠一 大学院環境学研究科教授

名古屋大学に赴任してから11年、楽しい事や嫌な事いろいろありましたが、あちこち彷徨ってきた私にとって一番長く居た職場でした。

教育では、ある留学生が印象に残ります。この人は授業や演習で私の議論に対しいちいち質問し反論するのです。普通の学生はあまり質問しません。論理的に非常に鋭い人で、お陰で演習が大変盛り上がりました。しかしこの人の反論は時にかなり執拗で、正直を言う内「この野郎」と思ったこともありました。こんな激論を何ヶ月か続けていくと、やがて相互理解が達成されたのか、爽やかな議論に変わり、お互いに信頼出来る関係になりました。海外に居ますが、今も互いに連絡を取り合っています。教えて本当に良かったと感じました。

研究と付合いで忘れられないのは浅津さんの事です。早朝と夜いつも彼の研究室には灯りがともっていて、どれだけ励まされたことか。まるで後で起こることを予感していた様に寸暇を惜しみ、その研究にかける意気込みは凄まじいばかりでした。浅津さんは欧州法思想史、私は情報社会史と全く異なる分野に関心がありましたが、話している内に究極の目標が現代社会の理解にあることで一致し、いつか二人の研究成果を統合しようと計画していました。結構我が儘ですが、人懐こく、情文の知恵袋としていろいろな相談にのってもらえました。それがこれから大活躍という時に突然亡くなってしまふとは本当に残念でした。



## 名大での7年

安藤 雅孝 大学院環境学研究科教授

東南海・南海地震の発生前に、震源域の直上で測定できる、海底地殻変動観測システムを作りたいと切望し、京大防災研究所で細々と開発を進めておりました。そんな折りに、理学部地震火山研究センターの藤井センター長（当時）が声をお掛けくださりまして、2000年4月に名大に着任しました。新しく海底観測の助手も採用され、技術職員の強力なサポートによりシステム開発が始まりました。

まず始めたのは、小回りのきく調査船探しでした。幸いなことに、静岡県と三重県の水産調査船の協力が得られました。しかし、システム造りは失敗の連続です。海底から引き上げたら測器の回路が焼き切れていた、巨大な電池を積んだ海底測器がすぐ応答しなかったなど、これではどうやってセンチメートルの精度を出すのか、と途方に暮れたことが何度もあ

ります。船が大きく揺れ、甲板で大波を浴びた時には、誰か海に流されたのではと凍り付くような思いもしました。しかし、若手研究者、技術職員、院生の奮闘で、3年前から成果が上がり始めました。現在は、安全に観測ができるシステムが確立し、海底の位置を5cm以下の精度で決められるようになりました。当初4年間、成果がほとんど上がらなかったのに、厳しい批判も受けずにシステム開発に専念できたのは、技術開発に重きを置いた地震火山センターのお陰です。今年度、海底観測研究から博士号取得者がでたのも朗報でした。名大海底グループの益々の発展を期待しています。



## “大学とは？”と考えるながら40年

三井 斌友 大学院情報科学研究科教授

名古屋大学での21年を含めて、1969年から大学教員として勤めてきてここで定年を迎えるに当たって、再び「大学とは」と問い直している。学生として入学して以来、過ごしてきたところは違っても一貫して大学にいたので、外からみれば「よその世界を知らずに」と思われるかもしれないが、だからこそ分かるところもあるのだと、もう「開き直る」しかないかもしれない。

京都大学のY先生はよく「業績は財産であるという考えは、大学の発展を阻害する」と言っておられた。大げさに言うと、人類史の全到達点を背負って、それを究め、理論に仕上げ、これを次世代に伝えてゆくという大学の本来的役割は、どの時代になろうとも本質的には変わらないのではないかと、また社会の他のどの機関もそれに代わることはできないので

はないかという思いに今は至っている。そこにはあらゆる意味で「私物化」の余地などないとの教えなのだろう。すると、我が身を振り返ってどうなのだろうか、忸怩たるところがある。しかし、大学の使命を意識しながら、先輩・同僚・後輩諸氏に恵まれて、精一杯の仕事はしてきたのではないかと密やかに思っている。

名古屋大学はまだまだ苦難の歩みを続けるであろう。しかし皆さんの力でその本質的な力を発揮してゆくに違いない。それを期待して、さらば名古屋大学、さらば名古屋。



## お世話になりました

西澤 邦秀 アイソトープ総合センター教授

名古屋大学理学部を卒業して以来、工学部、医学部、アイソトープ総合センター分館、本館と名古屋大学内の4カ所を移動し、40年間仕事をさせて頂いた。最も長いのが現在のアイソトープ総合センターで、18年間過ごしたことになります。

アイソトープ総合センターでの仕事には、研究と教育ばかりでなく、学内共同利用施設としての円滑な運営、また全学の放射線管理の要としての大事な役割があります。研究では、大学院の学生さんや研究生の方々と一緒に研究を楽しみ、学生さんはそれぞれの道に進んで活躍していることが、何よりの喜びです。センターの運営では、スタッフの献身的な努力のお陰で利用しやすいセンターを実現し、また大過なく過ごせたことに感謝しています。また、全学の放射線管理に関わ

た先生方は学問的にも優れているばかりでなく、個人的な利害を離れて、常に社会の中で名古屋大学は学内の放射線管理は如何にあるべきかとの視点に立って判断される高い見識をお持ちの方ばかりでした。多くの部局のこのような先生方と一緒に仕事をさせて頂く機会が得られたことは、私の大切な財産となっています。

これまで楽しく仕事をさせて頂いた名古屋大学とアイソトープ総合センターに心より感謝申し上げますと共に、益々の発展を祈念致します。



## 文理融合研究のゆくえ

伊藤 秀章 エコトピア科学研究所教授

昨年4月に附置研となったエコトピア科学研究所を設立1年目で退職することになりました。「エコトピア科学」という耳慣れない学問分野が、将来にわたって学術的にも市民権を得て定着することを期待している者の一人です。エコトピア科学の発展のためには、文系・理系を問わず環境と人間に関わる分野の研究者の融合学際研究が必須であると考えています。私どもの研究所では、この「エコトピア（社会）」のビジョンを明確にし、その実現を目指す科学研究のシナリオとロードマップを描こうとしています。

平成16～17年度に総長裁量経費を頂き、「文理融合型エコシステム科学」の創成・展開に関する公開ワークショップ及び国際シンポジウムを開催しましたが、そのさい文系・理系の内外の著名な研究者から大変貴重なご意見を頂き、これ

を基軸として求心力あるエコトピア科学研究の推進をはかろうとしてきました。私自身は工学研究科、工学系センターの出身であり、無機材料化学及び廃棄物処理が専門ですが、この分野の研究を全うするためにも文理融合学際研究の重要性を痛切に感じています。

「文理融合研究」というと欧米の研究者は「何をいませら？」と不思議に思うようです。その背景には、文系と理系のダブルメジャーの研究者が多く、文理融合はごく自然に受け容れられている事情があります。エコトピア科学の推進によって、わが国においても将来は「文理融合」が死語となることを願っています。



## 定年退職とは

上出 洋介 太陽地球環境研究所教授

ある年齢に達したら“公平”に退職しなければならないというのが定年退職ですが、いざ自分が直面すると、「年齢による差別」のように感じます。他の文明国と同様、この制度は近いうちに廃止される運命にあるでしょう。

振り返ってみますと、今までフルタイムとして在職した機関は、外国、私立大を含め8箇所、結局名古屋大学には一番長く“滞在”したことになります。私は、“法人組織や任期制は当たり前”のアメリカで研究者としてのスタートを切ったので、日本に帰ってきて生温さを感じたものです。アメリカには、世界各国から若い研究者が集まっていて、そのときの国際競争のおかげで生涯の友人が沢山できました。

所長在任の6年間は、国立大学の法人化という、高等教育の歴史に残る大改革とともに歩んだ期間でした。附随して、

「大学附置研の存廃選定」なる施策も出され、全国研究所長会議で深刻な議論が繰返されたことを思い起こします。

また、法人化への過程でよく聞かれたのは、「経営優先で、理念がない」という批判でした。たしかに、大学が活気あふれるためには、運営費交付金だけでは到底足りないわけで、経営戦略が必要でしょう。しかし、法人化で便利になった体制に魂を入れるのは大学構成員自身が行わなければならないことで、その出来方次第で、いい大学かそうでないかが分れます。「勇気ある知識人」を目指す名大のユニークさに期待しています。

## 本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年1月16日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
1 名大サロンの主役：浅井滋生・工学研究科教授 磁場の不思議を活用	1.16 (火)	中日 (朝刊)
2 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 俳諧紀行「誘ふひばり」 旅人も手厚く葬る人情	1.16 (火)	中日 (朝刊)
3 鈴木康弘・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授らが発起人となり「日本活断層学会 (仮称)」が9月に発足予定	1.16 (火) 2.14 (水)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
4 「第15回名古屋大学高等研究院セミナー」23日開催：上村大輔・理学研究科教授が「海洋生物に『くすり』を求めて」、松沢和宏・文学研究科教授が「草稿を通して浮上する新しいソーシャル像について」と題して講演	1.16 (火)	中日 (朝刊)
5 「第10回名古屋大博物館企画展 名大キャンパスの野鳥」1月23日～2月24日まで開催：東山キャンパスで撮影された野鳥の写真を展示 26日には、佐藤紳司・理学研究科助手が「都会の森に暮らす鳥たちの背景」と題して講演	1.16 (火) 1.22 (月) 2. 1 (木) 2. 8 (木)	中日 (朝刊) 朝日 (夕刊) 朝日 (夕刊) 朝日 (夕刊)
6 書籍 山口庸子・国際言語文化研究科助教授 『踊る身体の詩学』	1.16 (火)	中日 (朝刊)
7 時日記：就活編 尾関雄一郎さん・本学学生 マイベース守りゴール	1.16 (火)	中日 (朝刊)
8 学生辞典：「や」—小林さやかさん・本学学生 東山キャンパスの東地区へ行くこと 通称「山登り」	1.16 (火)	中日 (朝刊)
9 舛名大 (田中周一さん・本学学生) 初場所勝ち越し 序の口優勝決定戦は惜しくも敗れる	1.16 (火)	中日 (朝刊) 他2社
	1.19 (金)	中日 (夕刊)
	1.21 (日)	中日 (朝刊)
	1.22 (月)	朝日 (朝刊)
		他4社
	1.23 (火)	中日 (夕刊)
	1.25 (木)	中日 (夕刊)
10 「第40回 中部日本理工系大学高専剣道大会」14日開催：男子団体戦本学3位	1.16 (火)	朝日 (夕刊)
11 福和伸夫・環境学研究科教授が考案 建物の揺れるメカニズムが一目でわかる模型の家「ぶるる」	1.17 (水)	朝日 (朝刊)
12 防災特集：木村玲欧・環境学研究科助手 企業防災の方法を探る	1.17 (水)	日刊工業
13 時のおもり：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 「宇宙基本法の危険性」 軍事利用への道拓くな	1.17 (水)	中日 (朝刊)
14 福和伸夫・環境学研究科教授と三重県が共同で、次世代型震度計「SWING」を開発 インターネットを利用しデータの伝達をより早く、低コストで行う	1.18 (木)	中日 (朝刊) 他2社
	1.20 (土)	毎日 (朝刊)
	2. 7 (水)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年1月16日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
15 次期情報科学研究科長に古賀伸明・情報科学研究科教授が選任された	1.18 (木)	中日 (朝刊)
16 「新春・森づくり講演会」27日開催：只木良也・本学名誉教授が講演	1.18 (木)	中日 (朝刊)
17 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 転機に香った母の樟脳	1.18 (木)	朝日 (朝刊)
18 近藤孝弘・教育発達科学研究科助教授 「投票年齢を引き下げのには基本的には賛成だが、リスクを引き下げるために政治教育の在り方が重要だ」と指摘	1.18 (木)	朝日 (朝刊)
19 本学は、愛知県知事選の各陣営に、センター試験の英語リスニングに支障が出ないよう、試験当日の会場周辺での街宣活動の自粛を申し入れた	1.18 (木) 1.19 (金) 1.20 (土)	中日 (朝刊) 中日 (夕刊) 読売 (朝刊) 日経 (夕刊)
20 石原一彰・工学研究科教授らの研究グループ 環境に優しく高効率にリン酸モノエステルを合成する技術を開発	1.19 (金)	日刊工業 中日 (夕刊)
21 市橋克哉・法学研究科教授 名古屋市防犯カメラの設置に関する有識者懇話会会長に選任される	1.19 (金)	中日 (朝刊)
22 「放射性廃棄物地層処分シンポジウム2007 in 中部」2月9日開催：吉田英一・博物館助教授らがディスカッションを行う	1.19 (金) 1.24 (日)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
23 生命農学研究科と愛知県農業総合試験場が研究協力協定を締結	1.20 (土)	中日 (朝刊)
24 本学は、メタボリックシンドロームになりやすい体質の遺伝子について日本ガイシと共同研究を行う	1.20 (土) 1.23 (火)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
25 御嶽山で火山性地震が多発：木股文昭・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授 「すぐ噴火はないが、活火山であるという認識は必要」と語る	1.20 (土)	中日 (朝刊) 読売
26 「第12回日本集団災害医学会総会」開催：安藤雅孝・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授が基調講演	1.20 (土)	中日 (朝刊)
27 センター試験始まる リスニングで不具合が発生 本学会場では7名が再テスト	1.20 (土) 1.21 (日) 1.22 (月)	朝日 (朝刊) 他4社 日経 (朝刊) 他3社 朝日 (朝刊)
28 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 グプタ朝の渦巻唐草 命の輪廻転生を暗示	1.21 (日)	中日 (朝刊)
29 小島正宜・太陽地球環境所教授 地上から電波望遠鏡で太陽風の動きを観察	1.21 (日)	中日 (朝刊)
30 佐藤純・環境医学研究所助教授 間接痛と気象との相関関係をラットの試験で裏付け	1.21 (日)	日経 (朝刊)
31 太田裕道・工学研究科助教授などの研究グループは、人口宝石の原料となるチタン酸ストロンチウムから熱電変換材料を開発	1.22 (月)	朝日 (朝刊) 他4社
32 「名古屋歴史科学研究会例会」27日開催：若尾祐司・文学研究科教授が「歴史を知ること―過去への道は現在への問いから」のテーマで講演	1.22 (月)	中日 (夕刊)
33 宮田卓樹・医学系研究科教授らのチームが脳皮質成長の仕組みを解明	1.23 (火)	中日 (朝刊) 他2社
34 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 奇人の自叙伝 放浪茶人の奔放な人生	1.23 (火)	中日 (朝刊)
35 「応援しよう！理系女子中高生の未来の夢」2月10日開催：男女共同参画室が女子中高生の保護者や先生と女子生徒の理系進学をサポートする環境づくりについて懇談会を行う	1.23 (火)	中日 (朝刊)
36 「数理ウエーブ」27日開催：大沢健夫・多元数理科学研究科教授が「iは地球を救うのか(その3)…交点の探究」と題して講演	1.23 (火)	中日 (朝刊)
37 「中国語で中国を学ぶ談話クラス」1月27日・2月17日開催：趙青さん・本学大学院生が講師を務める	1.23 (火) 2.15 (木)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
38 活写！：尾関雄一朗さん・本学学生 笠松競馬場へ 誘導馬「ハクリュウボーイ」号を撮影	1.23 (火)	中日 (朝刊)
39 学生街ダンス：金田光湖さん・本学学生 富士登山 人生観が変わりそう	1.23 (火)	中日 (朝刊)
40 「公共事業における意思決定のプロセスと第三者機関の役割」30日開催：後房雄・法学研究科教授らが講演	1.24 (木)	中日 (朝刊)
41 耐震補強教材「紙ぶるる」を考案した鶴田庸介さん・本学大学院生 12年ぶりに恩師の授業を受ける	1.24 (水)	読売
42 「美術文化史研究会・金曜文化教室」2月9日開催：村松加奈子さん・本学大学院生が「蓮如上人絵伝とその絵解き」という題で講演	1.25 (木)	中日 (朝刊)
43 藤巻朗・工学研究科教授らは、演算能力が従来比約10倍の単一磁束量子(SFQ)プロセッサを開発	1.26 (金)	日刊工業

## 本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年1月16日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
44 次期国際言語文化研究科長に吉村正和・国際言語文化研究科教授が選任された	1.26 (金)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
45 速水敏彦・発達科学研究科教授 兄妹と夫婦の殺人事件の背景には、個人のプライドがあるのではないかと指摘	1.27 (土)	朝日 (朝刊)
46 こころを育む総合フォーラム提言：理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授 「日本の良き伝統伝えたい」と語る	1.27 (土)	読売
47 「見えてきた暗黒宇宙～最新の宇宙論から」2月11日開催：杉山直・理学研究科教授の講演	1.27 (土) 2. 2 (金)	日経 (朝刊) 朝日 (夕刊)
48 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 宝冠仏の仏伝曼荼羅 釈迦の悟り場面表す	1.28 (日)	中日 (朝刊)
49 読売新聞特別講座を受講して：リー・ソピアップさん・本学大学院生 「日本の社会について知るうえで有意義であり、優れた実践家の貴重な知識と経験を学んだ」	1.28 (日)	読売
50 舛名大 (田中周一さん・本学学生) の激励会が27日相撲部で開かれた	1.28 (日)	中日 (朝刊) 他2社
51 中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授 「文科省の全国学力テストは法的根拠が弱く、テスト対策に学校が走り正確なデータは得られないばかりか、個人情報保護の点で出題内容にも問題がある」と指摘	1.29 (月)	中日 (朝刊)
52 近藤孝男・理学研究科教授 朝日賞受賞スピーチ 「研究はある時急に境界が広がる瞬間があり、その瞬間は、自然は何か抗しがたい力があり、非常に美しいと思う」と語る	1.30 (火)	朝日 (朝刊)
53 本学は、医学系研究科に新年度から「トータルヘルスプランナー」養成コースを新設 総合的な医療知識を持ち施設などでリーダー的な役割を果たす人材を育成する	1.30 (火)	中日 (朝刊)
54 本学大学院の留学生が中心となり専門の枠を超えた国際的な学会「Feed Forth」を発足させた	1.30 (火)	中日 (朝刊)
55 愛知県知事選立候補者に突撃取材 「20歳の時夢は何でしたか」 丹羽亜衣さん・本学学生	1.30 (火)	中日 (朝刊)
56 本学大学院生が窃盗の疑いで逮捕される	1.30 (火)	中日 (朝刊) 他2社
57 講演会・超新星1987A 20周年記念：杉山直・理学研究科教授が「ニュートリノ天文学の誕生とこれから」と題して講演	1.30 (火)	中日 (夕刊)
58 健康東海プラザ 特集・医療相談：後藤百万・医学系研究科教授	1.31 (水)	読売
59 「愛知の百花繚乱フォーラム」2月3日開催：後房雄・法学研究科教授がコーディネーターを務め、魅力ある地域づくりについて考える	1.31 (水)	中日 (朝刊)
60 名岐駅伝チーム紹介：本学 東海学生駅伝の雪辱を果たしたい	1.31 (水)	中日 (朝刊)
61 沢田昭二・本学名誉教授 原爆症認定訴訟名地裁判決について 「個々の原告への判断において医学的知見にこだわりすぎ、総合的判断が貫かれなかった。国は残留放射線による内部被爆の影響を認め、認定基準を直ちに改めるべきだ」と指摘	1.31 (水) 2. 1 (木)	中日 (夕刊) 朝日 (朝刊)
62 中道治久・環境学研究科助手の「高密度アレイ地震観測による三河地方直下に発生する深部低周波微動の発生機構の解明」が財団法人東海学術奨励会の平成18年度助成対象に選ばれる	2. 1 (木)	中日 (朝刊)
63 備える：海津正倫・環境学研究科教授「高潮と津波は別物」、川崎浩司・工学研究科助教授「津波は、波というよりも一種の流れであり破壊力が強い」、木村玲欧・環境学研究科助手「地震＝津波連想を持つように心がけ、警報を待たずに逃げる意識を持つことが避難のポイント」とそれぞれ津波への警戒の重要性を指摘	2. 1 (木)	中日 (朝刊)
64 中教審第4期委員に理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授が再任	2. 1 (木)	読売 毎日 (朝刊)
65 家森信善・経済学部教授 産業再生機構について 「民間の再生を促す触媒の役割を果たしたが、『産業再生』といながら実態は『企業再生』だったという限界もあった」と指摘	2. 2 (金)	日経 (朝刊)
66 「ロボットシンポジウム2007 ロボットを考える 富山発ロボットの可能性」7日開催：福田敏男・工学研究科教授が講演	2. 2 (金)	日刊工業
67 朝日カルチャーセンター：「大宇宙の誕生～『銀河のたまご』からブラックホールの新しい顔まで」福井康雄・理学研究科教授、「東地中海歴史紀行～エーゲ海トルコの遺跡を訪ねる」周遠芳幸・文学研究科教授	2. 2 (金)	朝日 (夕刊)
68 大学入試2次試験出願状況：本学理学部6.6倍	2. 3 (土) 2. 7 (水)	読売 他2社 朝日 (朝刊) 他2社
69 天文学講演会「なんてん物語」10日開催：福井康雄・理学研究科教授、大西利和・同科助教授、水野範和・同科助手が講師を務める	2. 3 (土) 2. 6 (火)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
70 本学陸上競技部 大幸財団の芸術・文化・運動の助成団体に選ばれる	2. 3 (土)	中日 (朝刊)
71 中日新聞を読んで：海外の新聞報道から学ぶ 中西久枝・国際開発研究科教授	2. 4 (日)	中日 (朝刊)

## 本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年1月16日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
72 地域イノベーション創出事業に菅井秀朗・工学研究科教授の「高密度プラズマ処理によるプラスチック界面密着技術の実用化研究」が選ばれる	2. 5 (月)	日刊工業
73 愛知県知事選挙の分析 小野耕二・法学研究科 「対立軸を鮮明にするオーソドックスな選挙の結果、投票率は向上したが、県政では数値で表されるような政策領域は多くなく県政のあり方が大きく変わるかは疑問」と話す	2. 5 (月) 2. 6 (火)	中日 (朝刊) 読売
74 名岐駅伝競走成績：本学11位	2. 5 (月)	中日 (朝刊)
75 レーザー：藤巻朗・工学研究科教授 超電導利用に夢	2. 6 (火)	日刊工業
76 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 味わい深い医学随筆 酒色に励み不養生貫く	2. 6 (火)	中日 (朝刊)
77 college mode：鈴木絵里さん・本学学生 裁く側に立つことを意識 映画「それでもボクはやってない」	2. 6 (火)	中日 (朝刊)
78 西川芳昭・国際開発研究科助教授が長野県泰岐村クイクイモのワークショップのコーディネーターを務める	2. 6 (火)	信州日報
79 山口庸子・国際言語文化研究科助教授「ダンスや『スピリチュアルスポット』を巡る旅行の人気高さは現在の日本の世相を読み解く手がかりになる」と指摘	2. 7 (水)	朝日 (夕刊)
80 次期医学部附属病院長に松尾清一・医学系研究科教授が選出された	2. 8 (木)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
81 トリビア。ランキング：名古屋大グッズの紹介	2. 8 (木)	朝日 (夕刊)
82 二村雄次・医学系研究科教授 本学柔道部に畳135枚寄贈	2. 9 (金)	中日 (朝刊)
83 風向計：家森信善・経済学研究科教授 難しい株式投資アドバイス	2. 9 (金)	読売
84 吉川羊子・医学系研究科助手「尿漏れは、排尿日誌をつけ、早期に排尿障害を発見することが重要である」と語る	2. 9 (金)	中日 (朝刊)
85 本学同窓会と UFJ ニコスが提携し、「名古屋大学 UFJ カード」の名で4月以降に発行することを発表	2. 9 (金)	中日 (朝刊)
86 レーザー光の発光原理を学習する実験中にレーザー光で網膜損傷をした本学大学院生が本学を提訴 大学側は賠償額を協議して和解する方針	2. 9 (金)	朝日 (朝刊) 中日 (夕刊)
87 1944年東南海地震直後の写真発見：鈴木康弘・環境学研究科教授「複数の写真を組み合わせて立体的にみることで、被害状況や液状化現象を確認できる。また写真を使った聞き取り調査を実施し被害状況の把握をする。」と語る	2.10 (土)	中日 (朝刊) 読売
88 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 密教の五体の仏陀 金剛界曼荼羅の流行示唆	2.11 (日)	中日 (朝刊)
89 「全国こども地球環境シンポジウム」10日開幕：松見豊・太陽地球環境研究所教授が「オゾン層とフロン」について解説	2.11 (日)	中日 (朝刊)
90 経営の透明性を目指し国立大学病院院長選の投票資格を拡大：医学部附属病院では、係長級以上の職員、看護師、勤続5年以上のパート職員が1次選挙の有権者に追加された	2.11 (日)	朝日 (朝刊)
91 教育学部の学生らがボランティアで、交流を通じ障害児の発達を見守る「ちくさ日曜学校」の活動が800回目を迎え記念式典が催された	2.11 (日)	朝日 (朝刊)
92 慢性腎臓病 早期発見・治療が進行を防ぐ：松尾清一・医学系研究科教授 「腎不全への進行を防ぐために慢性腎臓病対策は急務だ」と語る	2.13 (火)	日経 (夕刊)
93 日本学士院06年度学術奨励賞に近藤孝弘・教育発達科学研究科助教授「国際関係における歴史教育政策に関する比較研究」が選ばれる	2.14 (水)	日刊工業
94 南方熊楠賞に伊藤嘉昭・本学名誉教授が選ばれる	2.14 (水)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
95 化学関連団体をまとめた「日本化学連合」が4月に設立：設立呼び掛け人である岡本佳男・本学名誉教授は、「政策提言するにも一団体の方が発言力がある」と語る	2.14 (水)	朝日 (朝刊)
96 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 周囲の無理解、尊厳に傷	2.15 (木)	朝日 (朝刊)
97 「憲法講座」17日開催：本秀紀・法学研究科教授「なぜ国民が政治の主人公になれないのかーあたらしい民主主義のはなし」の題で講演	2.15 (木)	中日 (朝刊)
98 杉本岳暁さん・本学学生 全日本学生柔道連盟の指導者研修で英仏への派遣者に選ばれる	2.15 (木)	中日 (朝刊)

## イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

### 3月17日(土)

場 所：経済学部カンファレンスホール  
時 間：10時00分～12時00分

### オープンカレッジ・自由奔放！サイエンス

講演題目：「神と人間のドラマ：旧約聖書を描いた絵画を読む」  
講 演 者：木俣元一（文学研究科教授）

[問い合わせ先]

経済学部・経済学研究科  
エクステンションサービス

### 3月17日(土)

場 所：環境総合館1階レクチャーホール  
時 間：13時00分～17時00分  
入 場 料：無料  
先着100名

### シンポジウム 津波「その衝撃と全貌」

プログラム：  
13時00分～13時10分 開会のあいさつ  
13時10分～15時10分 基調講演  
15時10分～15時30分 休憩  
15時30分～17時00分 パネルディスカッション



[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

### 3月20日(火)

場 所：博物館展示室  
時 間：13時30分～14時30分  
入 場 料：無料

### 第18回博物館コンサート (NUMCo)

演奏者：名古屋大学交響楽団（木管五重奏と弦楽器のカルテット）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

### 3月22日(木)

場 所：生命農学研究科 A 棟334号室  
時 間：15時30分～17時00分

### ICCAE2006年度第9回オープンセミナー

テ ー マ：農業開発のための大学・研究機関・国際協力機関の連携方策（仮題）  
講 演 者：小山 修（国際農林水産業研究センター研究戦略調査室長、農学国際教育  
協力研究センター客員教授）

[問い合わせ先]

生命農学研究科  
浅沼修一教授 052-789-4232

### 3月22日(木)

場 所：文系総合館7階オープンホール  
時 間：10時00分～12時00分

### 第62回招聘セミナー

講演題目：「ヨーロッパ高等教育の変革 — FD (ASD) による教育から学習への転換  
サポート」  
講 演 者：ブリキッテ・バーレント氏（ドイツ大学教授法研究協会）

[問い合わせ先]

高等教育研究センター  
夏目達也教授 052-789-5693

### 3月23日(金)

場 所：愛知県体育館  
時 間：10時00分～11時50分

### 平成18年度卒業式

[問い合わせ先]

学務部学務企画課 052-789-2159

### 3月23日(金)

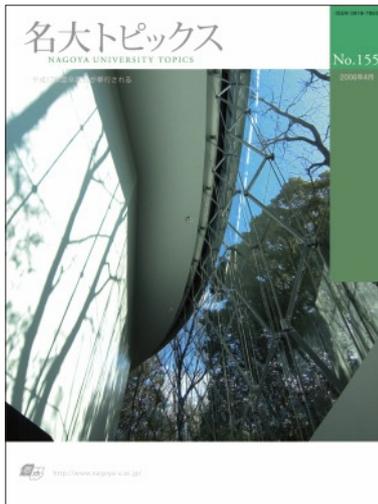
場 所：シンポジオン会議室  
時 間：16時30分～

### 平成18年度総長顕彰授与式

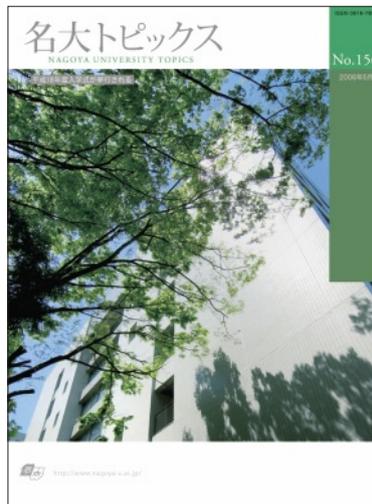
[問い合わせ先]

学務部学務企画課 052-789-2159

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
<b>3月26日(月)</b> 場 所：IB 電子情報館北棟10階 (創造工学センター) 時 間：10時00分～16時30分 対 象：中学生以上 参 加 費：300円  [問い合わせ先] 創造工学センター 052-789-5223	<b>第4回モノづくり市民公開講座</b> 内 容：メタルクラフト・モビールづくり
<b>3月27日(火)</b> 場 所：生命農学研究科 A 棟338号室 時 間：15時30分～17時00分  [問い合わせ先] 生命農学研究科 浅沼修一教授 052-789-4232	<b>ICCAE2006年度第10回オープンセミナー</b> テー マ：Ecophysiological characterization of Striga sp and its hosts in the sub Saharan Africa 講 演 者：Evans Atuti Atera (ケニア・ビクトリア湖流域開発公社精米総合部・上級農業研究員 / 精米所マネージャ、農学国際教育協力研究センター客員研究員)
<b>4月5日(木)</b> 場 所：愛知県体育館 時 間：10時00分～11時00分  [問い合わせ先] 学務部学務企画課 052-789-2159	<b>平成19年度入学式</b>
<b>4月10日(火)～7月14日(土)</b> 場 所：博物館展示室 時 間：10時00分～16時00分 休 館 日：日・月曜日 入 場 料：無料  [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	<b>第11回名古屋大学博物館企画展</b> <b>「地球は玉手箱～誕生石の魅力～」</b>
<b>4月7日(土)、14日(土)、21日(土)、 28日(土)</b> 場 所：博物館講義室 時 間：13時00分～16時00分 定 員：20名(初心者向け) 参 加 費：1,000円  [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	<b>ボタニカルアート(植物細密画)講座(4回連続)</b>



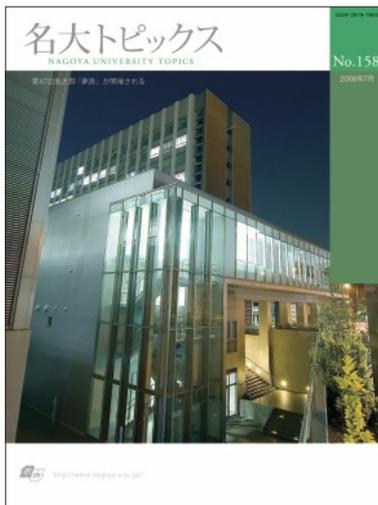
155号（2006年4月）野依記念学术交流館



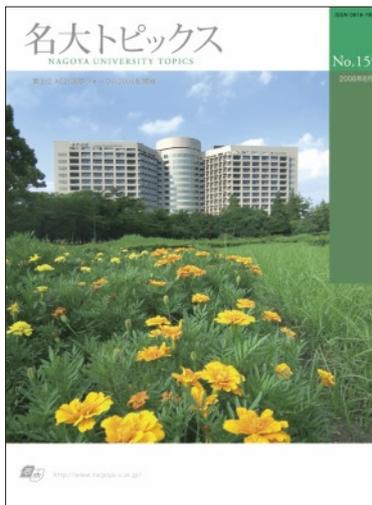
156号（2006年5月）文系総合館



157号（2006年6月）FOREST（フォレスト）



158号（2006年7月）IB電子情報館



159号（2006年8月）医学部附属病院



160号（2006年9月）高等総合研究館



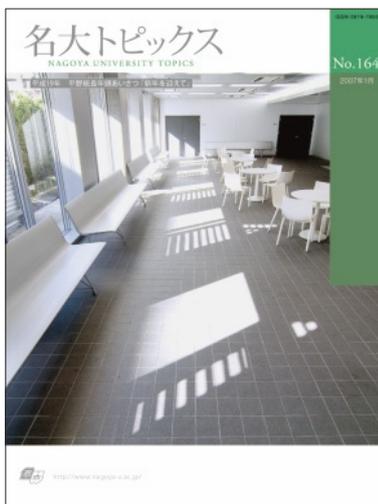
161号（2006年10月）留学生センター



162号（2006年11月）赤崎記念研究館



163号（2006年12月）理学館



164号（2007年1月）環境総合館



165号（2007年2月）国際嚶鳴館

名大トピックス No.166 平成19年3月16日発行  
編集・発行/名古屋大学広報室  
本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。  
名古屋市千種区不老町（〒464-8601）  
TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ  
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

#### 表紙

明るくクリーンな野依記念物質科学研究館エントランス  
(平成19年2月20日)



## 59 農学部旧安城キャンパス記念碑

昨年、1951（昭和26）年から1966年まで名大農学部があった旧安城キャンパスの跡地、安城市総合運動公園（安城市新田町）に、「名古屋大学農学部創設発展跡地之碑」が建てられました。

一昨年6月、農学部第1回卒業生の卒業50周年祝賀会が開かれました。これをきっかけに、第1回卒業生から記念碑建立の提案がなされ、昨年3月、瓜谷郁三名誉教授を会長とし、安城時代の教職員、第1回卒業生、鈴木國夫農学部同窓会会長、松田大学院生命農学研究科長などを委員とする、名古屋大学農学部創設発展記念会発起人会が発足しました。

そして6月には、瓜谷会長から神谷学安城市長に対し、農学部跡地への記念碑建設の要望書が提出されました。「日本デンマーク」と呼ばれた安城市（当時安城町）は、農学部を熱心に誘致し、附属農場も安城町の提供によるものでした。また、1935（昭和10）年に設立された産業組合

（現農協）立の安城更生病院には、医学部の前身の名古屋医科大学が全面的な支援を行うなど、名大と安城は戦前から浅からぬ関係がありました。今回も、安城市のご好意により、敷地が無償貸与されています。

建設費については、安城時代の関係者を中心に募られましたが、3ヵ月の間に目標額を上回る募金が集まり、昨年11月11日に、神谷安城市長、発起人会メンバーのほか、115名の臨席を得て除幕式が行われました。

現在、名大農学部時代の面影をしのばせるものといえば、当時テニスコートの隣にあった松林の一部のみで、記念碑もその近くに建てられました。すでにここには、農学部の前に同地にあった愛知青年師範学校（戦後愛知学芸大学安城分校）の記念碑があります。今回の建碑によって、農学部の基礎を築いた安城時代の記憶を残すとともに、この地の由緒の記憶も1つにつながったといえるでしょう。



1	2
3	

- 1 今回建てられた記念碑（白御影石、95×170×95cm）。後ろに見えるのが愛知青年師範学校の記念碑。
- 2 除幕式の記念写真。安城市総合運動公園は、名鉄新安城駅もしくはJR安城駅から名鉄バスで10分（「総合運動公園」下車）。記念碑は、公園の西端、野球場の西側にある。
- 3 安城キャンパスの航空写真。写真中の赤丸の地点に記念碑が建てられた。その下方に現在ごく一部が残る松林が見える。